平成 24 年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

―アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践―

神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國　隆志

長谷川如是閑の随筆に「国際的文化交通と写真」という一文がある。「未知未見の事物に関して、直観若しくは理解を与へるものは言語と絵画とである」が、所期の目的を達し得る理由は「錯覚」にあると言う。言葉は絵画や写真と比べて錯覚の自由が大きいため、「一般の知識、感情の交通に於いては寧ろ効果の多い，又は大きいものである。文学的または詩的の言語は、その知的正確さの欠乏のために、主観的に強度の反応を喚び起こすことが出来るのである」と述べている。

その例として、「昔、我が国の儒者は隣国支那を文化的理想国のやうに考える傾向が一般にあったが、それは彼らが現実の支那を見ることなく、全くただ言語又は絵画を通じてのみ支那を知ってゐたからである」ことをあげている。儒者の読む四書五経等を中心とした古典漢文を通して、当時の日本人は中国を見たが、恐らく現実の混沌とは異なる一大文化圏としての理想的な中国を正確に見ていたのである。それは間違いとか時代錯誤とか批判するにあたらない。何故かといえば、明治維新の志士たちが幼児期に学んだ素読や儒教入門にある言葉は日本開国のエネルギーとして機能したし、生死の境を前にして覚悟を決する当時の英雄豪傑の士が話すあるいは書いた檄文や辞世の句は、西洋文化に淵源する言葉ではなく中国古典の言葉かやまとことばかのどちらかであったからである。言葉が「国際的文化交通」であることの重要さは、意思伝達の利便さと機能性もさりながら、異文化同士の相互理解のためにどれほどよき「錯覚」を手に入れ、どれほど誤った先入観念を排除できるかにかかっている。

英語を外国語として生徒に教える教員は、自分が生育した文化世界と英語の文化世界とを自在に通行する努力を払うほかはない。その努力が止まったときが教員や研究者として停滞の時期に入ることなのであろう。理論を学び、現場で実践し、相手である生徒と教員である自分とが知性と情感において交流しながら共に向上していく研修がアカデミアでおこなわれる「英語教育アドヴァンスト研修」といってよいであろう。いま、開所以来の二回目の報告書が上梓されようとしている。参加された教員の方々、指導にあたられたアカデミアの教員、ともに創意工夫を重ねてたくさんの汗を流していただいた。私たちは、神奈川県の国際化に将来にわたって貢献するであろう生徒たちを大事に教育しなければならない。研修とは、受ける者も行う者もともに苦しい作業であるが、これからも立派な成果をあげるよう、如是閑が言うところの「国際的文化交通」を良き方向に進めていきたいと思う。

目　　次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは　1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト　3

「学習意欲」にかかわる指導
　学習意欲の維持と基礎的な語彙力向上を目指して　5
　「楽しい授業」「やる気が出る授業」の工夫　9
　動機づけを高める学習ストラテジーの指導　13

「語彙」にかかわる指導
　生徒が学習しやすい語彙指導の工夫　17

「聞くこと」にかかわる指導
　音読とディクテーションで伸ばす聞く力　21

「話すこと」にかかわる指導
　英語のリズムを意識して読むための音声指導　25

「読むこと」にかかわる指導
　生徒を励ます長文読解指導　29
　論理展開を意識したパラグラフリーディングの指導　33
　速読力向上のためのリーディングストラテジーの指導　37
　速読活動によるリーディング授業の改善　41

「書くこと」にかかわる指導
　パラグラフライティングの指導と自作評価スケール　45
　生徒と教師がともに学ぶ自由英作文の授業　49
　読解力向上のための英文要約指導　53
　教科書読後の５文サマリー活動　57

＊それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成２３年度から開講されました。

集合研修 9 日（前期 2 日、夏季 3 日、後期 4 日）、勤務校での授業研究 1 日（前期半日、後期半日、年間 2 回の研修スタッフによる授業訪問）から構成される合計 10 日のプログラムは、「多文化共生、異文化コミュニケーション」、「英語教師の専門知識、英語による発信力」、「授業研究、授業改善」を三つの大きな柱としています。

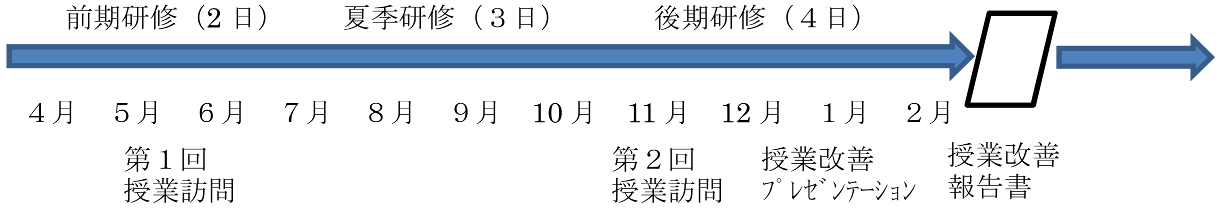
Objective 1	Objective 2	Objective 3
Multicultural Awareness	Expertise in English	Reflective Teaching
英語教育において多文化共生、異文化コミュニケーションを扱うことの意義について意識を高める。	英語による発信力、および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	みずからの授業を客観的に分析し、他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。

本年度は、14 名の参加者が、高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ、他の先生方とも協力してよりよい英語教育に貢献すべく１年間の研修を行いました。

初年度のプログラム内容を基本としながらも、平成２４年度は参加者のプレゼンテーションの機会を増やすなど、常に教室での実践を意識した研修となるよう心がけました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践、生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ、難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では、集合研修において多文化共生への意識、英語力、英語教育に関する専門知識を高めながら、勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



授業改善は「英語が出来るようになりたい」、「わくわくする授業が受けたい」という生徒の願いに応え、生徒の弱点を克服する支援をしようとする教師の姿勢が原動力です。今年度の報告書からは、研修参加者が捉えた生徒の授業への願い、英語学習における弱点を推察することができます。

■ 情意面
- 生徒の願い：やる気を出したい
- 生徒の弱点：成功体験が少ない／基礎知識が足りない／目標がない／学習法を知らない

■ スキル面
- 生徒の願い：長文が読めるようになりたい／自己表現したい／音読やﾘｽﾆﾝｸﾞに慣れたい
- 生徒の弱点：木を見て森を見ず／話す・書く経験不足／発音に関する知識と練習不足

■ 知識面
- 生徒の願い：単語を覚えたい／文法を理解したい
- 生徒の弱点：単語を発音できない／英文法について根本的な原則がわかっていない

生徒の弱点を教師の指導上の弱点と捉えどう授業改善をするか。生徒が自ら学ぶ力を育てながら教師として授業をどう工夫するか。研修参加者一人一人の挑戦は研修終了後も続きます。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は三つあります。第一に、研修参加者がみずからの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイディア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

１．授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒は皆それぞれの可能性をもっているとの認識に立つ。

２．学校や生徒の状況について読者に参考となる情報を記述する。

３．実践結果については、当初の目標の達成如何にかかわらずその結果を記述する。

４．授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。

５．データ処理や分析については将来的には厳密さを目指したいが、本報告ではあくまで授業改善の一助として位置づける。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

１．自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

２．授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

（例）英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。
　　　音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

３．改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

４．生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

（質的データの例）生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録
（数量的データの例）標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

５．改善目標の設定

現状把握に基づき、どれくらいまで改善したいかを数値目標を掲げて設定します。

（例）大きな誤りのない７文以上の英文で自己紹介が書ける生徒がクラスの８割以上になる。

６．目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

（例）新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

７．生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

８．報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します（研修最終日に英語による口頭発表も行います）。

○ 生徒の変化

さまざまな学校でさまざまな生徒と向き合っている先生方の実践から、今年度は下のような「生徒の変化」がみられました。限られた期間での取組のなかで、設定が高すぎて目標が達成されなかったというものもありましたが、質的に、数量的に、あるいは両面で、確実に生徒の学習意欲や英語の力は向上しています。このプロジェクトで明らかになった向上を教師と生徒が共有し、一緒にさらなる目標に向かっていくことができれば、より活気のある授業、教師と生徒が元気になれる授業が実現するでしょう。

（例）学習意欲・達成感の向上、音声に対する意識の向上、自律学習の確立、語彙サイズの向上、英作文を書く力の向上、読解力の向上、速読力の向上

○ 教師の変化

このプロジェクトでは、「この授業改善を通して教師自身がどのように変わったか」ということも重視しています。授業における課題は教師が動かなければ解決しません。生徒、指導法、教材などに対する新たな視点をもたなければ、現状は変わらないでしょう。今年度受講した先生方からは、次のような「教師の変化」が出ています。

（例）
- 生徒に目標や活動の目的、効果を説明してから授業をするようになった
- ICT を効果的に活用するようになった
- 授業の準備をより周到に行うようになり、言語活動のバリエーションも増えた
- 以前より生徒の可能性を信じられるようになった
- 一人ひとりの生徒の学習状況を把握しながら、良い点を見つけてほめるようになった
- 生徒に英語を使わせたいという気持ちが高まった
- 生徒の反応を客観的に見ながら、生徒が考え、成長する授業を心がけるようになった
- 音声指導に対する意識が高まった
- 活動やワークシートに少し工夫を加えるだけで、生徒の取組が変わることを実感した
- ゴールを設定して、生徒の力を調べながら、改善を加えていくことの重要性を再認識した

さらに、改善のための手だて（指導法や言語活動）やデータ分析の方法を考えるために、他の教師と情報交換をしたり、アカデミアでの他の研修に参加したり、文献にあたったり、研究会に参加したりするなど、積極的に取り組む先生方の熱意が感じられました。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

学習意欲の維持と基礎的な語彙力向上を目指して

科目名	英語Ⅰ	学 年	1	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

総合技術科の１年生２クラス（計 59 名）で、全員男子である。どちらのクラスも明るく、打ち解けた雰囲気を感じさせる。活気に満ちている反面、集中力に欠けることも多い。１年生全員対象の進路希望調査によると、進学と就職が半数ずつであった。

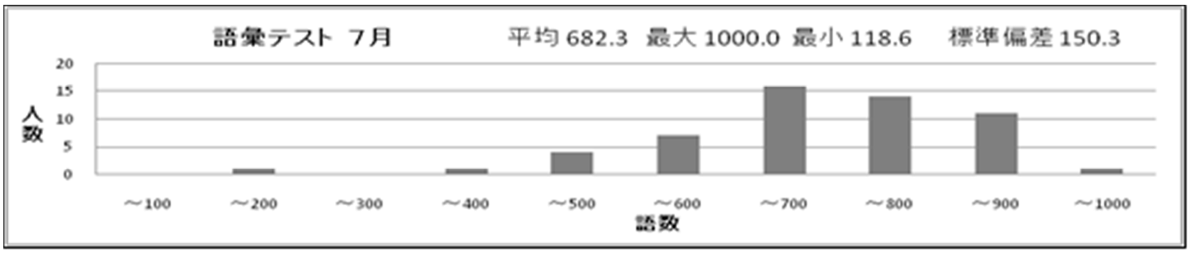
解決すべき課題

学力検査の結果から､中学校段階の英語が十分には身についていない生徒が多いと予想された。中学時代の英語について聞くと、授業はそれなりに楽しかったが、得意ではなかったという生徒が多い。本校では学年が進むにつれて専門の授業が増え、３年では専門科目の実習が大半を占める。このため生徒は、英語に限らず、普通教科の学習意欲を徐々に失う傾向にある。基本的な英語の力を養い、同時に、楽しく自信をもって学習に取り組ませるにはどのような指導が必要か、本研究を通じて考えた。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

１．語彙テストの実施（７月）

自作の語彙サイズテストで、中学校レベルの語彙の定着度を測定した。形式は、1,000 語レベルの単語集から無作為に 60 語抽出し、日本語の意味に合致する英語を 6 つの選択肢から選ばせるというものである。

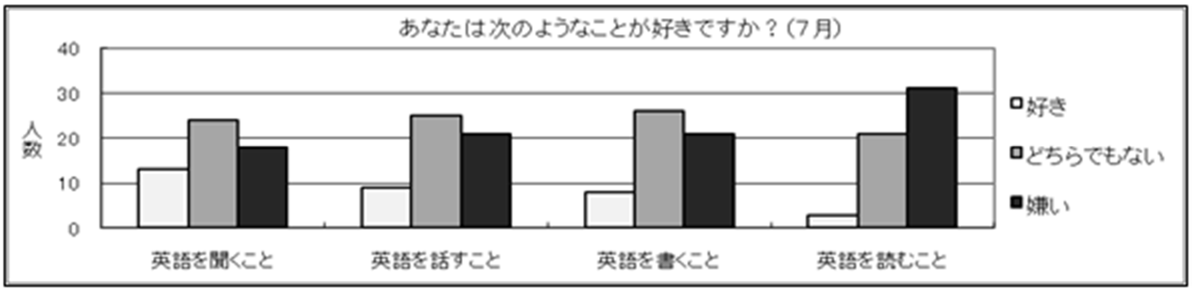


平均 682.3 語は、中学校学習指導要領（旧版）が指定する 900 語をかなり下回る。

２．意識アンケートの実施（７月）

英語に関する生徒の意識も調査した。質問は、英語への関心、外国文化への関心、身につけたい英語力、将来の英語の必要性に対する考えなどで、25 項目設定した。3 段階で回答する形式で、意欲の度合いを 100 点満点で測れるよう、回答が肯定的なものから 4 点、2 点、0 点で得点化した。その結果、平均 47.3 点、最大 76 点、最小 12 点、標準偏差 18.1 になった。質問の一つ、｢あなたは英語が得意ですか？｣への回答は、得意 6 人(10.9%)、普通 15 人（27.3%)、苦手 33 人（60.0%）となり、これは当初の予想を裏づける結果であった。

また、別の質問で4技能の好き嫌いをたずねたところ、次のような回答を得た。



いずれも「好き」が最も少ない。なかでも、英語を読むことが好きと答えた生徒は55名中3名（5.5%）だった。一方、今後への希望が感じられたのは「英語を聞くこと」への回答で、好きと答えた生徒が13名、どちらでもないと答えた生徒24名をあわせると67.2%に達した。

3．授業アンケートの実施（9月）

授業で行う活動を14項目に分け（うち8項目は教科書の内容理解にかかわる活動、残りは語彙などに関する活動）、興味をもって取り組んだ活動、取り組みにくかった活動を複数回答可でたずねた。その結果、生徒が最も興味を持って取り組んだのは「単語・文法小テスト」(55.6%)、最も取り組みにくかったのは「日本語で問われた単語を英語で速答する練習」と「ペアワークによる単語練習」（ともに27.8%）だった。いずれも語彙にかかわる活動である。「単語テストくらいは良い結果を出したいが、練習は自分のペースでやりたい」という生徒の本音がうかがえる。同時に、単語練習を核にして授業展開を工夫することで、生徒の英語の力を伸ばせるかもしれない、との見通しが得られた。

改善の目標

1．能力の向上：当該クラスの語彙サイズ平均が2割向上する。

2．意欲の維持：当該クラスの意識アンケート合計得点の平均を維持する。

改善のための手だて

1．単語テストを授業の柱の一つにし、これに向けた練習を工夫すれば、基本語彙が不足している現状が改善でき、同時に4技能向上の基盤づくりが進むであろう。

① それまで行っていた文法、単語、発音等の小テストを単語テストに絞り、毎授業で行う。

② テスト前に直前復習、テスト後に次回予習の時間を十分にとる。

③ フラッシュカードを利用した口頭練習（表面のイラストや写真で単語を推測させ、裏面の綴りや用法を音読させる）と、練習用紙への書き取り練習によって定着を図る。

2．動機づけを高めるための活動や働きかけを行えば、英語の学習意欲が維持できるであろう。

① リスニング活動の導入：4技能のなかでは生徒たちにとって一番取り組みやすい「英語を聞く」活動を毎回の授業に加える。英検4級のリスニング問題を使い、テスト形式で行う。生徒には、好きな技能をさらに伸ばすための練習であり、たとえ結果が悪くても成績には影響しないと伝える。

② 単語テストでの目標設定：上記単語テストに6～8割の合格目標点を毎回設定し、目標に達した生徒を挙手させて確認する。達成者は必ずほめることにする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

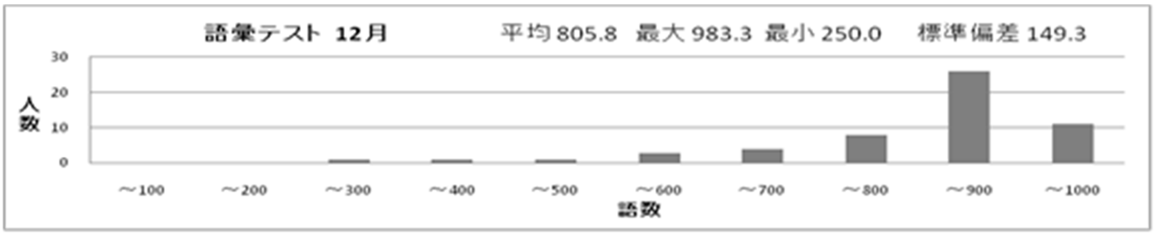
１．単語テストによる現状改善と４技能向上の基盤づくり

① 途中経過

単語テストはその前後の練習も含めて当初10分で行う予定だったが、たびたび15分を越えてしまった。それでも生徒は毎回集中して取り組んだ。特にフラッシュカードを利用した口頭練習では、多くの生徒がカードに注目し、単語が推測できた生徒からは満足げな表情が見て取れた。ただし、毎回のフラッシュカード作りは思いのほか大変で、教員補助者の協力がなければ継続できなかった。

② 検証結果

１２月に、7月と同様の語彙テストを再び行った。結果は以下のとおりである。



平均805.8語は１２月に比較して18.1%向上しており、目標の２割向上には届かなかったものの、この間に行った単語テストとその前後の練習が語彙サイズの向上に大きく貢献していると考えられる。

２．動機づけを高めるための活動や働きかけ

① リスニング活動導入の途中経過

問題が比較的容易だったため、取組状況は良く、簡単すぎるとの声も上がるほどだった。そこで、基礎レベルから始めた活動を、一気に応用レベルに引き上げた。正答率は下がったものの、生徒たちの取組には真剣さが増した。

② 単語テストにおける目標設定の途中経過

目標点を言い忘れると、生徒たちから「今日の合格点は？」と確認された。外発的動機づけを促す試みだったが、これを励みに単語練習に精を出す生徒がいたことは確かなようだ。

③ 検証結果

１２月に、７月と同じ質問内容の意識アンケートを行った。結果は、平均50.3点（７月に比較し3.0点上昇）、最大94点（同18点上昇）、最小16点（同４点上昇）であった。合計得点の平均を維持するという目標は達成された。この間の、動機づけを高める活動や働きかけが効果を上げたと考えられる。

回答状況を詳しく見てみると、否定的ではない回答の数（3段階の上から１つめの肯定的回答と２つめの中立的回答を合わせた数）が次の５項目で10%増加していることがわかった。

・「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか」10.8%増加（「得意」「普通」の計）

・「英語を聞くことは好きですか」15.8%増加（「好き」「どちらでもない」の計）

・「外国の人に道を聞かれたら答えたい」10.2%増加（「そう思う」「どちらでもない」の計）

・「海外旅行などで困らない英語力を将来身につけたい」10.1%増加（同上）

・「英語で仕事ができるくらいの英語力を将来身につけたい」17.0%増加（同上）

なお、否定的な回答が 10%以上増加した項目はなかった。「リスニング活動などで少しず

つだが英語が好きになってきた」「多少は英語に自信もついてきた」「いつかは自分も英語を使うかもしれない」「英語を使う仕事に就いているかもしれない」…そのようなセルフイメージを持つ生徒が生まれつつある結果と信じたい。

教師の変化

授業で一斉に行う動機づけを高める活動や働きかけとは別に、生徒一人ひとりの動機づけを高める方法はないかと考えるようになった。以来、次のようなことを心がけ、実行した。

・ノートやメモのとり方が上手な生徒を見つけたらず必ずほめる。
・ペアワークが上手な、特に相手へのフォローが上手な生徒をたびたびほめる。
・良い答えをした生徒に対しては、ほめるだけでなく、「前と比べてすいぶん進歩したね」などと念押しをする。
・英語に自信のない生徒から「どうせ将来、英語使わないから」の発言が出るたびに、社会人になってからも仕事などで英語が必要になる可能性があることを言い聞かせる。

今後の課題（次の改善点など）

意識アンケートで気がかりな点が２つある。一つは、英語を苦手だと感じている生徒が１２月時点でまだ 50.9%いることである。引き続き、少しでもこの苦手意識を減らしたい。もう一つは、4 技能中で最も人気の低い「英語を読むこと」への対策である。今後さらに、生徒たちの興味･関心に踏み込んで、読みの楽しさを味わわせたい。

動機づけを高める取組もさらに続けたい。例えば、仕事上英語が欠かせない卒業生を探して、生徒たちの前で講演をしてもらうなど、インパクトのある仕掛けを用意したい。

まとめ・感想

生徒を教えていて気になるのは、彼らがどんな学習経験を経ているのかということだ。長沼（2006）によれば、英語が嫌いと答える学習者は中学段階で嫌いになった層が多く、そのような生徒は高校になってから英語を好きになる割合は少ないという。また、何らかのきっかけで英語嫌いになってしまった学習者に対しては、情意面での改善を図りつつ、技能面での手当てもしていく必要があるという。生徒たちの過去、そして将来に気を配りつつ、引き続き授業改善にチャレンジしていきたい。

今回の研修にあたって、アカデミアのスタッフの皆様には大いに感謝申し上げたい。いただいた資料を見直して、１年間の研修で取り上げられたトピックの幅の広さに改めて驚かされた。本研究に関連しては、７月の Motivation に関するものが特に役立った。重ねて感謝したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

長谷川正(編著).(1989).『フレッシュ英単語』桐原書店
旺文社(編著).(2010).『英検４級総合対策教本』旺文社
長沼君主.(2006).「日本の高校生の英語学習に対する小中高での情意変化と動機づけ」『東アジア高校英語教育 GTEC 調査 2006 報告書』Benesse 教育研究開発センター

「楽しい授業」「やる気が出る授業」の工夫

科目名	英語 I	学 年	1	形 態	H R・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男女比はほぼ半々、生徒の多くは大学進学希望だが、一般受験は 10～15%程度で、ほとんどが指定校・一般推薦、AO 入試等により、学力試験を受けずに進学していく。そのため、学校の定期テストの前には勉強するが、みずから勉強する意欲がやや乏しい生徒が多い。

解決すべき課題

生徒に「やる気」を出させ授業に集中させる、家庭学習をさせる、ということが大きな課題である。「テスト前に出るところだけを効率よく覚える」のではなく、「みずから勉強してその楽しみを知る」経験をしてもらいたい。そのために今までの授業システムを見直し、どのようにすればより生徒のやる気が出るか、を今回のテーマとする。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

まずはアンケートを実施し生徒の現状を把握する。その上で生徒が何を求めているか、どうしたらよりやる気が出るかを知る。今までの授業システムを抜本的に変えるのではなく、ちょっとした工夫で効果の出るやり方を探る。以下は事前アンケートの結果である。

＜英語 I 授業改善のためのアンケート１：９月＞　回答計 69 人

１．中学時代、英語は…	A（①好き 22　②普通 30　③嫌い 17）
	B（①得意 12　②普通 27　③苦手 30）
２．英語が難しいなと感じたのは…	C（①中１ 16　②中２ 34　③中３ 19）
３．英語 I の授業は…	D（①難しい 29　②易しい 8　③普通 32）
	E（①おもしろい 28　②つまらない 6　③普通 35）
４．授業の流れを…	F（①理解している 36　②理解していない 33）

（授業の流れ）

①　本文の概要（日本語）　授業プリント Part 1 前半が配られて…
②　見ないで Listening 1（日本語）　CD → 教師の音読 → Listen 答え合わせ →板書
③　語彙学習　辞書で単語を調べる → 答え合わせ →板書 →リピート
④　まめ知識（文法など）各自調べる・考える → 答え合わせ → 板書
⑤　見ないで Listening 2（英語）　CD → 教師の音読 → Listen 答え合わせ→ 板書
⑥　日本語訳　訳す → 答え合わせ → 板書 → プリント完成 → サイン → 後半プリント
⑦　読み　CD を聞く → 読みの解説・教師の音読 → リピート → 読みのテスト
⑧　自習（5 分）→ 小テスト → 自己採点

５．授業の流れ①～⑧について、(複数回答可)

一番おもしろい部分は？(G)　一番つまらない部分は？(H)

真剣に取り組んでいる部分は？(I)　適当に流している部分は？(J)

もっとじっくりやってほしい部分は？(K)　不要だと思う部分は？(L)

改善して欲しい部分は？(M)　＋自由意見

	G おもしろい	H つまらない	I 真剣	J 流す	K じっくり	L 不要	M 要改善	合計 69人
① 本文の概要	6	1	8	15	0	1	0	31
② Listening1	0	3	9	3	0	0	3	18
③ 語彙学習	16	9	14	6	9	5	0	59
④ まめ知識	8	6	0	9	3	6	0	38
⑤ Listening2	0	0	3	12	8	0	0	23
⑥ 日本語訳	10	0	18	2	22	2	2	62
⑦ 読み	19	3	10	4	16	4	6	62
⑧ 小テスト	0	4	24	0	10	2	1	41

（自由意見）文法やりたい、うまく読めるようになりたい、英語を話せるようになりたい、やる気が出るようにしてほしい、など

６．学校以外（家や塾など）での英語学習については…　O（①家や塾で定期的にする 6　②テスト勉強だけはする 40　③授業以外ではほとんどしない 23）

考察：上記アンケート結果と、観察、面談により、①単語・日本語訳・小テストを重視している、②リスニングをあまり重視していないが、うまく読みたいという生徒が多い、③やる気を出させてほしいと思っている、④入学以前から英語に強い苦手意識をもつ生徒、または英語を学習する目的や必要性がないと感じている生徒のほかに、進路がほぼ決まりかけて勉強することに意欲を失っている生徒もいる、⑤もともと家庭学習の習慣がない生徒や、どのように授業を受ければよいかわからない生徒がいる、ということがわかった。このような生徒が「楽しい」「もっと学びたい」と感じられるような活動を授業に取り入れる必要がある。

<u>改善の目標</u>

もう一度 12 月にアンケートを取り、

・「英語Ｉの授業はおもしろい」という生徒が半数以上になる。

・「授業の流れを理解している」という生徒が７割以上になる。

・授業の活動について「以前よりもやる気が出た」という生徒が半数以上になる。

改善のための手だて

・音読活動を充実させれば、うまく発音したいという生徒の気持ちが高まり、授業にも集中させることができるだろう。

① 本文の穴埋めプリントを配り、ペアで読みの練習をさせる。読む人はプリントを見ながら読み、聞く人はプリントと教科書を見ながら聞く。読む人が穴埋めのところで止まってしまったら答えを教えてあげる。終了したら交代する。一通り終了したら相手を替えて繰り返す。時間内に（10～15 分程度）にたくさん練習することが目的である。

② 苦手な単語を板書し、リピート練習をさせる。英語と日本語の発音の違いなどを解説する。（リズム、イントネーション、３種類の-ed 発音、音の脱落、リエゾンなど）

③ ペアで読みの練習→発音解説→リピート→指名読み（点数をつける）→自習→小テスト　を１時間でスムーズにできるように時間配分に気をつける。

・家庭学習を促すために次回のプリントを前渡しして、予習をしてきた生徒にポイントを与えれば、生徒のやる気をより高めることができるだろう。

・授業中、生徒になるべく文法、語彙、文化などに関わる多くの質問をし、よい発言、自発的な発言にポイントを与えれば、生徒のやる気をより高めることができるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

＜英語Ｉ授業改善のためのアンケート１：１２月＞　回答計 69 人

１．英語Ｉの授業は…　A（①難しい 21　②易しい 9　③普通 39）
　　　　　　　　　　　B（①おもしろい 37　②つまらない 4　③普通 28）

２．授業の流れを…　　C（①理解している 53　②理解していない 16）

３．２学期になって「読み」の部分に今まで以上に時間をかけ、１時間で「穴埋めプリントによるペアワーク」「難しい単語の解説と口頭練習」「英語と日本語の発音の違いの解説」「音読練習と小テスト」を行ってきたが、このやり方の効果（勉強しやすさ、やる気）について…
　D（①少しよくなった 66　②変化なし 3　③悪くなった 0）
　E（①やる気が出た 51　②変化なし 18　③やる気がなくなった 0）

４．２学期になって、プリントを先に渡し、自分で予習してきた人にはポイントをつける、というやり方をしたが、このやり方の効果（勉強しやすさ、やる気）について…
　F（①少しよくなった 24　②変化なし 45　③悪くなった 0）
　G（①やる気が出た 34　②変化なし 35　③やる気がなくなった 0）

５．授業中に「問題が解けたら先着５名にポイント加算」「いい発言にはポイント加算」という機会を今までより増やしたが、このやり方の効果（勉強しやすさ、やる気）について…
　H（①少しよくなった 51　②変化なし 18　③悪くなった 0）
　I（①やる気が出た 54　②変化なし 11　③やる気がなくなった 4）

６．学校以外（家や塾など）での英語学習については…　J（①家や塾で定期的にする 10
　②テスト勉強だけはする 49　③授業以外ではほとんどしない 10）

７．授業改善のアイディアに関する自由意見
　①「よい発言にポイント」に賛成(4)、頭のいい人ばかり有利になるから反対(1)、②ペア読みはよいが、もう少し時間がほしい(3)、③音楽や音声 CD があるといい(4)、④たまに宿題

が必要(3)、⑤小テスト５点以下は補習する(1)、⑥一人ひとり時間をかけて面倒見てほしい(1)、⑦今のままでよい(15)、⑧がんばります(1)

考察：①授業の流れを理解する生徒が増えた（慣れた）、②勉強する生徒も増え、小テストの平均点が上がった、③生徒は「面倒を見てほしい」「励ましてほしい」と思っている。

教師の変化

・ペアで読み練習をすることにより友達関係がよくなり、リピートの声も大きくなった。教師としてはうれしいことであった。
・予習をする生徒が増え、教師として「この生徒たちはやればできる」という思いが強まった。
・教師もしっかり予習をし、段取り、時間配分に今まで以上に気をつけるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

改善の目標はほぼクリアすることができた。授業での集中度や取組はだいぶ向上したので、次は家庭学習をする生徒を増やしたい。現在でも熱心に予習をしてくる生徒がいるので、その意欲をいかにクラス全体に浸透させるかを考えている。

まとめ・感想

今回の取組で生徒から学んだこととして、次のことが挙げられる。

・生徒は英語の力を伸ばしたいと思っているが方法がわからない。
・生徒はやるべきことをはっきりと指示されることを好む。
・常に精神面のサポートや励ましを必要としている。
・努力をしたときにはほめてほしい、という気持ちが強い。
・時には宿題も必要だ、と生徒自身が思っている。
・マンネリ授業に陥らないことが大切である。ちょっとした変化でも効果はある。
・すべての生徒の希望に沿うのは不可能に近いが、共通のニーズには応える必要がある。
・授業準備、教材研究はしっかり時間をかけて行うことが必要である。
・50 分間をフル活用できるよう、リズム、ペース、段取りを考えることが重要である。
・教室に 5 分早く到着し、5 分長くいることで、生徒とのコミュニケーションが高まる。そのためには準備を万端にしておく必要がある。

しかし何よりも一番大切なことは、日頃から生徒とたくさんコミュニケーションをとり、しっかりとした人間関係をつくることだと思う。生徒の学習態度は環境や働きかけによって変化する。何気ない教師の一言によってやる気を出したり失ったりする。時宜を得た適切なアドバイスができるためには、少しでも長く彼らと接し理解することが肝要である、と実感した。

動機づけを高める学習ストラテジーの指導

科目名	英語Ⅰ	学 年	1	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は、男子 40 名 女子 40 名（A クラス：男子 19 名女子 21 名、B クラス:男子 21 名女子 19 名）である。部活動に参加している生徒も多く、明るく活発な雰囲気がある。学習意欲はあるが、集中力が続かない生徒も見受けられる。

解決すべき課題

英語が将来に必要であると感じている生徒は多いが、自主的に学習したり、目標を持って取り組んだりする生徒は少ない。中学時代に週 3 時間の英語の授業で学んできた本校の 1 年生は、基礎的な語彙や文法の力が不十分であると思われる。彼らの将来を考えると、みずから学習の計画を立て、学習に取り組み、英語力を伸ばしていける自律的学習者を育成する必要がある。そのための学習の方策を指導し、学習意欲・動機づけを維持・向上させることが今回の目標である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・校内一斉授業評価の集計によると、学習に対する意欲はあるものの、75%の生徒は家庭での学習時間が 1 時間に満たない。

・4 月に授業で行った英語学習のアンケートでは、50%の生徒は英語に興味を持っているが、70%は不得意感を持っている。90%以上は将来役に立つと回答している。英語の学習に対する目的意識が薄い生徒もいる。

改善の目標

・生徒が学習ストラテジーを使用して学習できるようになる。
・英語学習の動機づけを維持、向上させる。

改善のための手だて

○ 英語学習ストラテジーを指導すれば、生徒が自律的に英語学習に取り組むようになるだろう。
 ・英語学習ストラテジーの自己評価の実施（各課の終わりに実施）
 ・英語学習の目標の設定（各課に入る前に実施）
 ・ペアやグループでの活動の奨励と自己評価
 ・自主的なノート作成の指導

○ 学習ストラテジーを活かし、動機づけを高めるような活動を行えば、学習動機の維持、向上につながるだろう。
 ・ゲームやペアワーク、グループワークを取入れた活動の実施
 ・自主的に学習できる教材の作成と配布

・英語学習の進歩が確認できる指導（速読指導・実力テストの複数回実施とその成果の報告）
・自主的な学習の推奨（長期休業中の多読指導や英文日記を盛り込んだ宿題）

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

動機づけアンケート（Ryan and Deci, 2000；廣森, 2006 を参考にして作成）と英語学習ストラテジーに関するアンケート(Oxford, 1990 を参考に 10 項目を選んで作成）の 2 つのアンケートを７月と１２月に実施し、学習成績・実力テストの結果とあわせて検証の資料とした。

＜学習成績・実力テスト・英語学習ストラテジー・動機づけの相関について＞

・７月のアンケートの調査後に上記の項目について統計処理したところ、内発的動機づけと学習ストラテジーの項目に相関があった。
・「記憶しやすくするために工夫して繰り返し復習する」という項目と学習成績に緩やかな相関が見られた。

＜英語学習ストラテジーの変化について＞

・平均を比較するための t 検定（一対の標本による平均の検定）で検定したところ、2 回の学習ストラテジーのアンケートの結果は表１のとおりであった。このことから、学習ストラテジーの指導により、項目によってはストラテジーの使用が有意に増すことがわかった。

表１	7月	SD	12月	SD	伸び	p値
①記憶しやすくするために工夫して、繰り返し復習する	3.65	1.46	3.92	1.31	0.27	**0.06**
②英語の文章を分析したり、日本文に訳してみたりする	3.75	1.39	3.83	1.25	0.08	0.30
③ノートをとったりして大切なことをまとめる	3.96	1.46	4.04	1.33	0.08	0.50
④手がかりを使って推測する　countless -less=「～ない」	3.27	1.37	3.71	1.15	0.44	0.00
⑤話したり書いたりできない時には手振り身振りを使う	3.18	1.49	3.74	1.26	0.56	0.00
⑥自分の学習の目標を設定して、達成する努力をする	3.62	1.32	3.83	1.23	0.21	**0.07**
⑦自分の学習を自己評価する	3.08	1.36	3.36	1.24	0.28	0.05
⑧自分を鼓舞したりほめたりする。	3.01	1.46	3.05	1.27	0.04	0.54
⑨チェックリストや学習日記などを使って自分の学習把握する	2.57	1.41	2.93	1.26	0.36	0.01
⑩お互いに訂正したったり教えあったりして、クラスメートと協力する	3.52	1.46	3.36	1.18	−0.16	0.18

（６件法で「6とてもよくやった」～「１全くやらなかった」で評価）

・図１は記述式アンケートの中で、それぞれの項目について「新たに使った項目」、「あまり使わなかった項目」、「以前から使っていた項目」として挙げた生徒の割合(%)である。表１で伸びが認められた項目について見てみると、「新たに使った」として記述にも表れている項目と、「あまり使わなかった」とされているものがあった。生徒が明示的に自覚しているストラテジーと、たずね方によって揺れが生じる、定着が不安定なものがあるということが言えるかもしれない。
・記述をさらに分析すると、「単語テスト時に工夫したら覚えられるようになってきた」「音読するようになった。」「ちょっとできるようになってきた」など「何らかの改善を指摘している者」が 22%で、「変わっていない」というコメントが 15%あるが、「不十分な学習を反省している者」が 15%、「努力の目標をあげた者」が 11%、「英語の学習の進歩を自覚している者」が 11%おり、総じて、学習ストラテジーの使用を前向きにとらえている記載が多かった。

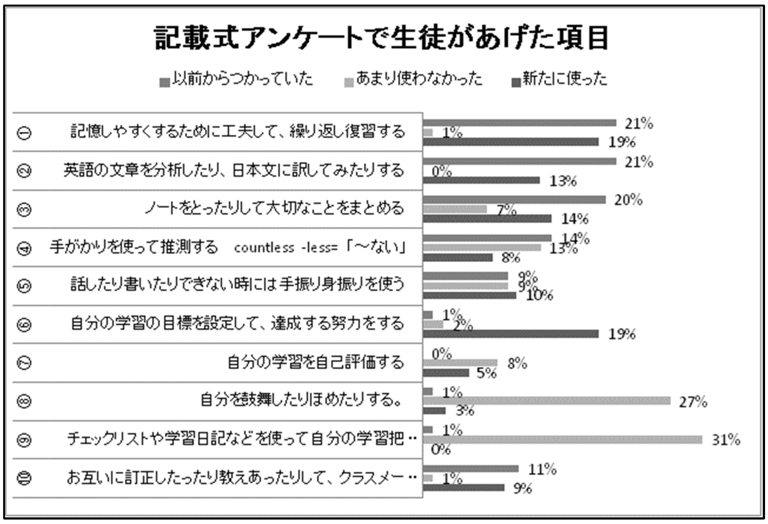


図１

＜動機づけの変化について＞

・図２は７月と１２月の動機づけのまとめである。動機づけはほとんど変化がなかった。無動機は少し下がっている。

・図３・４は前期に成績が上位だった生徒の学習ストラテジーと動機づけの変化のグラフである。学習ストラテジーの使用も内発的動機づけもおおむね向上している。

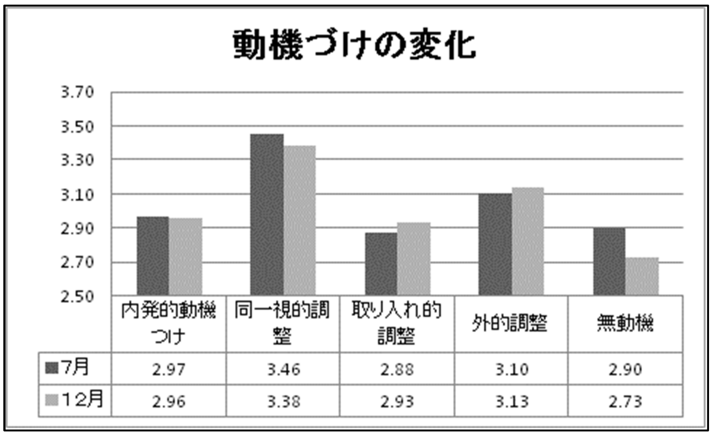


図２

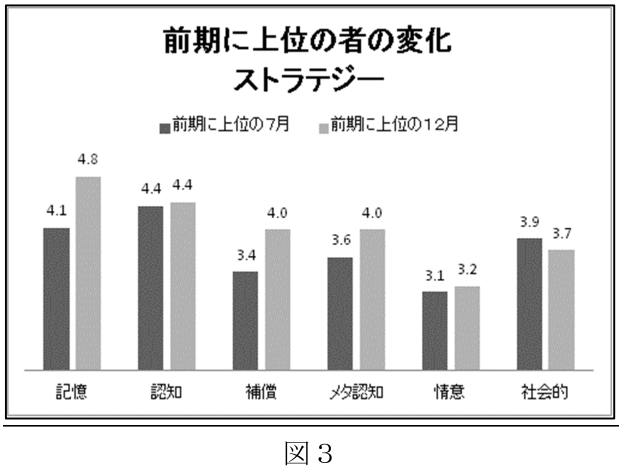


図３

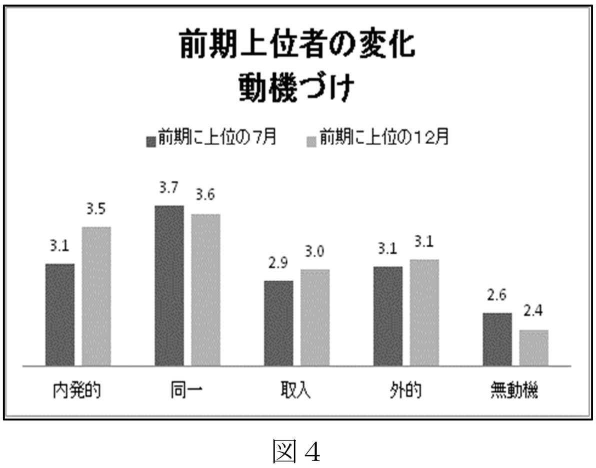


図４

＜結論＞

・ストラテジーの指導によって、統計的に有意な動機づけの向上を見ることはできなかった。

・成績上位の者の比較では、ストラテジーと内発的動機づけの向上はおおむね確認できた。

・相関分析から学習ストラテジーと動機づけとの関連は推測できる。

・ストラテジーを指導することによって、意識的な使用率が高まることがわかった。

・記述式アンケートでは、英語学習ストラテジーの使用に関して、積極的・好意的な回答をしている生徒が多く、英語学習ストラテジーを指導する意味と必要性はあると考えられる。

教師の変化

ストラテジーの使用や動機づけを高める指導をするうちに、生徒に英語を使わせたい、英語を積極的に学習してほしいという意欲が私自身の中で高まった。より良い教材の作成や導入法の工夫などが積極的に行えるようになり、授業の展開のしかた・生徒を活動させる方法などを考える機会となった。また、生徒の反応を見ながら対応できるような客観的な姿勢も取れるようになったことは自分自身にとって収穫であったと思う。

今後の課題（次の改善点など）

・記憶ストラテジーと英語の成績との相関を考慮に入れて、「学習と記憶」に関する知識を深めて指導に役立てる。
・英語学習ストラテジーの使用を前向きにとらえているアンケート結果が得られたので、より具体的に学習ストラテジーや学習の仕方を示し、長期的に指導する。
・生徒に合った、よりわかりやすい英語学習ストラテジーを研究し、指導の内容やその方法をさらに工夫して、生徒自身がストラテジーを活用できる力を育成する。
・アンケートの取り方によって、結果が異なることなどを考慮して、リサーチを行うときには、複数のアンケートを実施し、幅の広い解釈を行うようにする。

まとめ・感想

入学時の学習に対する動機づけを１年間持持続させることは、難しいかもしれない。今回の指導では、前述したような変化はあったものの、動機づけを向上させることはできなかった。一方、学習ストラテジーを意識的に指導することで、実際に生徒がそれを自律的に使うようになることが確認できた。このリサーチによって、自分の今後の教育活動に有益な示唆を得ることができた。

また平成２５年度からの新学習指導要領の実施にあたって、自分の授業を客観的に観察できたことで、多くの改善点を確認することができ、貴重な研修であった。参加者のみなさんの熱心に学ぶ姿勢に感化され、得ることも多かった。また、アカデミアのスタッフの方々の熱心な指導に心から感謝すると同時に、研究の熱心さにも心から敬服している。

授業改善にあたって参考にした資料等

Hiromori, T.(2011). Motivation and language Learning strategies of EFL high school student: A preliminary study through the use of panel data, JACET, NII-Electric Library Service, 31-41

Ryan R.M and Deci, E.L. (2000) Intrinsic and extrinsic motivation: classic definitions and new directions, *Contemporary Educational Psychology*, 25, 57-67

Oxford, R.L.(1990). *Language Learning Strategies－What Every Teacher Should Know*. Heinle & Heinle Publishers, Massachusetts

廣森友人. (2006).『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版

生徒が学習しやすい語彙指導の工夫

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は２年生１クラス 40 名（男子 18 名、女子 22 名）である。元気で前向きで、いつも笑顔が見られる。英語が苦手な生徒が多いが、授業には集中し学ぼうという意欲も感じる。全体の雰囲気としてはとても良く、教師に対しても協力的である。

解決すべき課題

・生徒の語彙力の不足

多くの単語の意味がわかれば、英文を難しいとあまり感じることなく、読むことへの抵抗を軽減させることができると考えられる。しかしながら、現状では基礎的な語彙が不足しており、教科書本文の大意を把握するのも困難である。リーディングの授業であるのに、予習、授業内、授業後を通して、生徒が主体的なリーディング活動（自分の力で読んで理解しようとする活動）にかかわる場面が少ない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

＜英語に関するアンケート・授業評価アンケート＞

７月に行ったアンケートでは 6 割の生徒が英語を勉強することが「嫌い」「あまり好きではない」と答えている。理由としては、「単語や文法など覚えることが多く、難しい」というものが大半を占めていた。授業評価アンケートでは２学期に向けて単語を頑張りたいという生徒が多かった。

＜推定語彙サイズの測定＞

「語彙サイズ測定テスト」（相澤・望月, 2010）を６月に実施し、4000 語レベルまで測定した。

語彙サイズテストの結果（６月実施）

	平均値	最大値	最小値	標準偏差
第１回	1426	2115	577	424.86

中学校の目標語彙数は旧指導要領で 900 語、新指導要領で 1200 度程度とされているので、語彙サイズテストの結果をみれば、その目標語彙数はクリアしており、望月テストの元である「北海道大学英語語彙表」における中学必修レベル 786 語は受容語彙としては習得しているものと考えられる。しかし、授業中に“different”の意味をたずねると、当該クラスを含む３クラスで「難しい」（difficult）と答えるなど、中学レベルの語であっても、意味をとっさに想起できるまでには定着していないことがうかがえた。

改善の目標

語彙指導を工夫し、基礎的な語彙を定着させる（推定語彙サイズ２割増の 1700 程度を目指す）。

改善のための手だて

○ 語彙を調べる時、辞書代わりに単語集を活用させれば、基本語彙への意識が高まり、その定着に役立つだろう。

教科書の語彙について、副教材である『Vital3000』（文英堂）で調べさせることで、そこに収録されているものについては基本語彙であり、用法まで深く知っておく必要があるという意識を高めることができる。その際、チェックさせることで学習履歴を残すこともできる。教科書と副教材を別々のものとして使用するのではなく、それぞれを結びつけることで、単語集の有効的な活用が可能になる。

○ 発表語彙と受容語彙を区別した語彙のワークシートを与えれば、勉強しやすくなることで、生徒が語彙学習に積極的に取り組むようになるだろう。

教科書の単語について、汎用性が高く、将来自己表現に使わせたいもの（発表語彙）には単語集で調べて語訳を記入するタスクを設定し、意味だけ理解できればよいと判断したもの（受容語彙）にはあらかじめ語訳を与えておく、というように明示的に区別した語彙教材に取り組ませる。

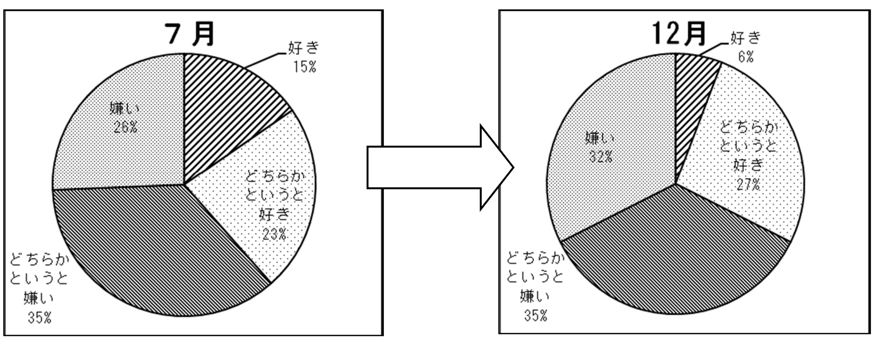
○ 自主学習用のインターネットサイトに単語テストのための練習問題を作成し、活用させれば、生徒は楽しんで語彙学習に取り組むようになるだろう。

『Vital3000』の単語について授業中に小テストを行い、定期テストにも出題する（学年共通活動）。テスト範囲の語について、オンラインの無料クラウド型音声付き暗記カードである“Quizlet”で自主的に練習させる。生徒は訳語をみてスペリングを入力したり、訳語と英語をマッチさせたりしながら、ゲーム感覚で楽しく単語を覚えることができる。

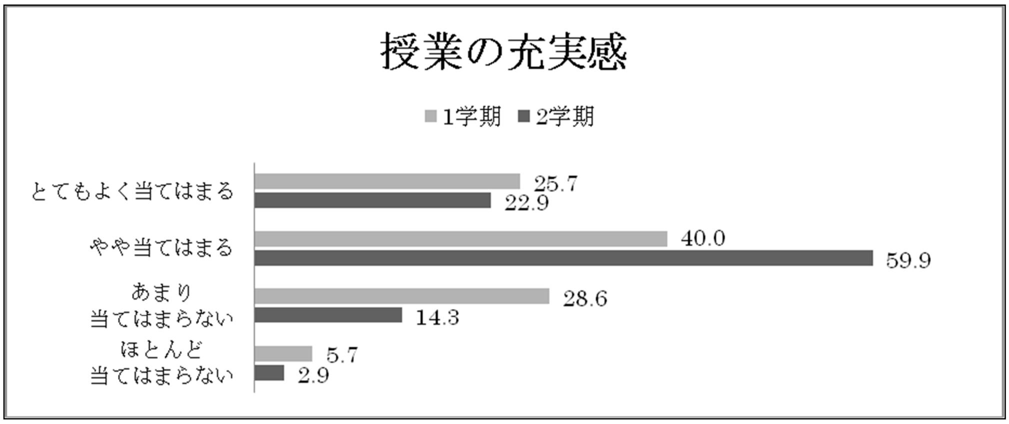
生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

＜生徒の取組状況＞

全体的に１学期よりさらに授業に集中するようになり、予習だけではなく授業や単語テストの復習をする生徒も何人か見られるようになったが、12 月に行った英語学習に関するアンケートでは英語を勉強することが「好き」と答えた生徒の数は減り、「嫌い」だと答えた生徒数が増加した。その理由としては、「母国語ではないから」「難しい」「文法がわからない」というものであった。この結果を受け、生徒自身が英語を勉強することが楽しいと感じるような授業の組立や教材の工夫をもっとする必要があったと考える。



＜授業評価アンケート＞



授業評価アンケートにおいては授業の充実感についての項目に「とてもよく当てはまる」「やや当てはまる」と答えた生徒の数は１学期に比べて約17%増え、65.7%から82.8%になった。

＜Quizletの感想＞

肯定的コメント	・携帯電話でも勉強できるので、時間の有効活用ができる。 ・思っていた以上に使いやすく、覚えやすい。 ・英単語と意味を合わせるのが楽しく、ゲーム感覚で勉強できた。 ・普通に暗記するよりは楽しい。
否定的コメント	・そのページにたどり着くまでが大変だった。 ・勘でできてしまうので、本当に覚えているかがわからない。 ・使い方に慣れるまで時間がかかる。

実際に利用した生徒は120人ほどの生徒のうち、わずか27人にとどまった。生徒が自律的に語彙学習に取り組むには効果的なツールであり、実際に利用した生徒からは肯定的なコメントが多かったので、もう少し積極的な利用を勧める必要があったと感じる。

＜単語テストの点数の推移＞

担当クラス　(10点満点)　1学期　6.0点　→　2学期　5.2点　(-13.3%)

２学期の平均は１学期より下がってしまったが、これは先へ進むにつれ、単語の難易度が高くなるためかもしれない。そこで、他のクラスの単語テストの結果と比較した。

担当外クラス　(10点満点)　1学期　4.3点　→　2学期　2.8点　(-34.9%)

この結果から、担当クラスの方が点数の下がり方が緩やかであることが判明した。

＜語彙サイズ測定テスト＞

語彙サイズテストの結果の推移(6月・12月実施)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差
第１回	1426	2115	577	424.86
第２回	1743	2692	462	455.82

１２月に２回目の語彙サイズテストを行った。１回目から２回目の語彙サイズの伸びは統計的に有意な伸びであることが認められた。平均は1743となり、2割以上向上するという目標は達成された。最も伸びた生徒は1115から2077へと962語も増やし、結果を受け取った時の表情は満面の笑みだった。語彙サイズが向上した他の生徒たちもとても良い表情をしていた。

教師の変化

研修を受ける前は自分の授業を変えなくてはと思いつつも、ワンパターン化した授業に慣れてしまっていた。授業観察で多くのアドバイスを受け、客観的に自分の授業を見つめ直すことができた。一つひとつの活動の意味を考えると、生徒にとってあまり効果的でないものもあり、そのような活動を省き、生徒が理解するための時間にあてることにした。ワークシートについても同様にアドバイスを受け、明確な目的を持って工夫する必要があることを改めて実感した。

また、今までフラッシュカードを作らずに語彙指導を行ってきたが、ワークシートを使う活動の前にフラッシュカードを使うことで全員が顔を上げて単語の発音や意味の確認をすることができ、クラス全体が活気づいた。何よりも生徒の表情を見ながら行うことができるので、助けが必要な時にはすぐに気づくことができるようになった。

しかし、単語集『Vital3000』の単語テストでも、事前に発表語彙と受容語彙を分けておけば、生徒は勉強しやすくなり、得点も上がって自信につながったはずである。今後はすべての活動によりしっかりした一貫性を持たせて授業を進めていきたい。

今後の課題（次の改善点など）

・語彙力向上の必要性を再認識できたので、継続目標とし、みずからの授業力を高める。
・文法が難しいと感じる生徒が多いので、文法力を向上させたい。
・「わかる」授業、達成感を得られる授業を目指し、常に生徒のニーズを把握しておく。

まとめ・感想

1 年間に渡るこの研修を通して、これからの教員生活における心構えなど大切なものを学ぶことができた。プロの英語教師としての自覚を持ち、生徒にどのような力を身につけさせたいのかという明確な目標を立て、それを達成するにはどのようにアプローチをしていけばよいのかを常に考えておく必要があることを再認識した。研修で学んだことを授業で行った時、それまでとは違った反応が見られ、生徒たちが生き生きとし、目が輝いていた。生徒たちはちょっとした工夫によって変わるということを肌で感じることができた。また研修を一緒に受けている先生方からも刺激を受け、自分の英語力不足を痛感し、高める必要を強く感じた。

最後にこの研修を受ける機会を私に与えてくださった校長先生他勤務校の先生方、研修を通して多くのことを教えてくださった国際言語文化アカデミアの先生方、そして一緒に研修に参加しさまざまな助言をくださった先生方に感謝したい。そして、この研修で学んだことを無駄にすることなく、常に向上心を持ち続け、生徒と自分のために努力し続ける教師でありたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

望月正道・相澤一美・投野由紀夫. (2003).『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店
田中武夫・田中知聡. (2003).『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店
岡秀夫・赤池秀代・酒井志延. (2004).『＜英語教員研修プログラム対応＞「英語授業力」強化マニュアル』大修館書店
相澤一美・望月正道. (2010).『英語語彙指導の実践アイディア集』大修館書店

音読とディクテーションで伸ばす聞く力

科目名	英語 I	学 年	1	形 態	H R・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

今回対象としたのは男女ほぼ同数の 29 名のクラスである。習熟度別クラスのうち、基礎・基本の指導がより必要なクラスであるが、授業に対して取り組もうという雰囲気はある。

解決すべき課題

今回の改善研究に当たり、「英語を聞く力(リスニング)」を伸ばす手だてに焦点を当てた。

授業の中で、読解問題では答えられた問いを口頭で質問した際に、ほとんどの生徒が反応することができなかった。リスニングは音素を聞き分ける、認識した情報を保持する、意味を認識するという過程を踏むが、今回は、「音素を聞き分けること」「情報を保持すること」に焦点を定めて改善を図る。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

５月に教科書『Power On English I』（東京書籍）Lesson 2 Part2 を使って、教科書を見ながら次のような活動を行った。

① 教科書に載っている問題に答える。（生徒には英文構成力を身につける練習として、教科書の英文の抜き書きではない完全な文で答えるよう指導していた。）

問： Why did people start to make cheese?

正答：They did so [did it] to preserve milk during the long winter months. A 評価

They started to make cheese to preserve milk during the long winter months.
（教科書の文をそのまま引用したもの）B 評価

To preserve milk during the long winter months.
（文の構成はできていないが、要点を理解している解答）C 評価

それ以外の解答に対しては D 評価、記入していない場合に E 評価として集計した結果、次のようになった。

A 7 人(25%)　B 11 人(39%)　C 8 人(29%)　D 0 人(0%)　E 2 人(7%)

② 書かれた設問を読み、それに対する正しい答え（選択肢）を聞き取る。

問： What is one way to preserve food in hot climates?

音声による選択肢：(1) Cheese is.　(2) Milk is.　(3) Cows are.　(4) Spices are.

正答：(4)に対して正答率は 80%（26 人中 21 人）　であった。

③ 章末の復習として、①と同じ問題をＡＬＴが口頭で質問をし、それに答える。（質問は比較的ゆっくりと複数回繰り返し、考えをまとめる時間も十分に与えた。）

問： Why did people start to make cheese?

正答：They did so [did it] to preserve milk during the long winter months. に対して、①と同じ基準で評価をして集計をした結果、次のようになった。

A 1 人(3%)　B 2 人(7%)　C 7 人(25%)　D 0 人(0%)　E 19 人(65%)

・文字で見せた設問には 93%の生徒が C 評価以上の解答をしているが、同じ設問が音声になると 36%に落ちていることから、聞き取りに課題があるということがわかった。

改善の目標

・4 語から 7 語程度の英語の情報を聞き取り正しく理解する力をつける。
・「事前の状況把握」③の事例を基に、「コミュニケーションが取れている」と判断できる評価 A, B, C の人数を 90%以上にする。

改善のための手だて

・音読活動の際に暗唱(Read and Look Up)を 4 語程度のチャンクで行えば、まとまったチャンクとして英語を認識することで、音声を短期記憶に留め置く力を伸ばすことができるであろう。
・ディクテーションを繰り返し練習することで、聞き取った事柄を素早く文字として認識する力を伸ばすことができるであろう。

単語レベルのディクテーションからからはじめて、徐々にチャンクを大きくする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

＜Read and Look Up の取組状況＞

Read and Look Up を始めた時はなかなか声が出ていなかったが、時間をかけて繰り返しやってゆくと声の出方もだいぶ良くなった。4 語程度のチャンクであれば、覚えてテキストを見ずに言えるようになった。

＜Read and Look Up 形式での音読テスト：７月＞

評価基準:「声の大きさ」5 点、「流暢さ」10 点「単語の発音の正確さ」10 点

23 点以上…A、18 点以上…B、13 点以上…C、10 点以上…D、10 点未満…E

結果： A…7 人(25%) B…17 人(61%) C…4 人(14%) D…0 人(0%) E…0 人(0%)　（欠席 1）

（参考）５月に行った文を見ながらの音読試験の結果

A…6 人(21%) B…20 人(69%) C…3 人(10%) D…0 人(0%) E…0 人(0%)

テキストを見ないで発音するので負荷が大きくなったにもかかわらず、同レベルの結果となったことから、日頃の Read and Look Up の練習によって、4 語程度のチャンクの音声処理は身についたと言えるだろう。

１０月から Read And Look Up を 7 語程度のチャンクに増やして練習したところ、生徒はついてくることができなくなってしまった。4 語程度のチャンクと 7 語程度のチャンクの負荷は予想以上に違っていた。そこで、全文ではなく特定の文に絞って、7 語程度のチャンクを繰

り返し練習するという形に変更した。
＜ディクテーションテスト＞
4 語程度を空欄にして書き込ませる形式で継続的に行った。
評価基準：10 点満点で、小さな綴りの誤りは減点しなかった（例 believe=beleive など）。音声では聞き取れているが、文構造として理解できていないと判断できるもの(例 it's/its など）には部分点を与えた。また、どうしても綴れない場合にはカタカナでの表記を許容し、部分点とした。

10 点中 9 点以上を A、7 点以上を B、5 点以上を C、3 点以上を D、3 点未満を E として人数を集計したところ、下の表のようになった。

	A の人数	B の人数	C の人数	D の人数	E の人数
1 回目			25	2	1
2 回目		13	7	5	1
3 回目			7	19	
4 回目		25	2	1	
5 回目		17	7		1
6 回目		27			2

3 回目のみ 7 語程度を空欄にして書き込ませる形で行ったが、多くの生徒に基礎的な語彙や文法知識の不足がみられ、A となる生徒がいなかった。しかし、4 回目以降 B にあたる生徒数が増えたことから、一定の成果があったと判断できる。ただし、4 語を超えるチャンクの処理は生徒たちにとって困難であることがわかった。

＜最終検証：口頭質問に対する回答＞
「事前の現状把握」③の形式で 7 月、１１月、１月の 3 回のテスト結果をまとめると、次のような人数分布になった。

	A 評価	B 評価	C 評価	D 評価	E 評価
7 月	1	2	7	0	19
１１月	1	3	9	6	8
1 月	2	4	11	10	2

改善目標値（A, B, C 合わせて 90%以上）を大幅に下回っているが、E 評価（無回答）の生徒の数が大幅に減って、文法や綴りなどの誤りはあるものの積極的に解答を書く姿勢が見え始めたことは、応答するための情報を聞き取る下地ができたと言える。

教師の変化

- 今まで、「読解の力をどのように身につけさせるか」とか「語彙などをどのように身につけさせるか」について意識をしてきたが、調べてみると生徒の聞く力が予想以上に不足していることがわかったことから、日頃から音声をまじえた指導を心がけなければならないと実感した。
- 音読をさせる時にも、単純に音読をするのではなく、練習の目標を明確化する（今回は Read and Look Up によるチャンクの一時記憶の訓練）ことで、音読の活動が活性化することに気づかされた。
- 生徒にとって、英文情報の 4 語と 7 語では想像以上の負担の違いがあったことに気づかされ、言語活動を行うときには、生徒の認知処理能力を的確に見定めながらそれに少しプラスしたレベル設定をする必要があることを再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

今回は「聞く力」の育成をねらいとした実践を試みたが、実際に行った活動は Read and Look up とディクテーションであり、「音声の意味処理に基づいて適切に応答する」という段階まで深めることができなかった。本来「聞く力」とは「音声認識」、「記憶保持」、「情報処理」、「応答（再生）」という過程の連鎖であるが、「読むこと」「書くこと」とも密接に関係する「情報処理」「応答（再生）」の力を伸ばすにはチャンクを大きくするだけでは不十分である。たとえば、ディクテーションで A の人数がいなかった理由として、音素が聞き取れないというよりも、文構造の理解ができていない（it's/its など）生徒が多かったということが挙げられる。ディクテーションで満点をとれた生徒がいなかったことは今回の目標達成において、重要な課題である。

まとめ・感想

リスニングに焦点をあてて検証をしてきたが、現在担当している生徒の多くが、単語を覚えたり英文を読んだり書いたりする速さがとても遅く、それ自体が学習の妨げになっていると感じられた。リスニングは特にその影響を受ける活動であった。今回注意深くかつ具体的に生徒の変化を観察、考察してきたことにより、「なんとなく」で工夫をするよりも問題点を明確に理解でき、次の課題も具体的に設定することができた。また、生徒とともに課題やテストの結果を比較したり考えたりする機会となったので、生徒にとっても学習目標が理解しやすくなったり、若干ではあるが動機づけにもなったと思う。今後も、問題の発見から事前調査を経て手だてを考え、実践と検証をくりかえす過程を意識して授業づくりをしてゆこうと考える。しかし、最終検証の段階で E 評価にあたる生徒をなくすための手段について考える必要があると感じた。

英語のリズムを意識して読むための音声指導

科目名	英語Ｉ	学 年	1	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は１年生２クラス(男子 43 名、女子 38 名、計 81 名)である。ひとつのクラスは静かでまじめな雰囲気で、もうひとつのクラスは穏やかで明るい雰囲気のクラスである。全員が大学への進学を希望している。学習に取り組む姿勢は素直で前向きである。

解決すべき課題

・生徒の話す英文に強弱のリズムがほとんどない。

事前の現状把握

課題について、2 つのことが背景にあると考えた。ひとつは英語のどこに強勢を置けばいいかという知識をもっていないことである。もうひとつは、強勢を意識して英語を読む練習をしていないことである。生徒の実状を調べるために、強勢に関する意識をアンケートで調査し、パフォーマンスについては音読テストで測定することにした。

＜アンケート＞

事前に実施したアンケートでは以下のような数字が出た。

質問：「英語を読んだり話したりするときに、基本的にどこを強く読みどこを弱く読めばいいかということを知識として持っていますか。」

（ア）かなり持っていると思う　3.8%
（イ）少し持っていると思う　40.5%
（ウ）ほとんど持っていないと思う　48.1%
（エ）全然持っていないと思う　7.6%

（ア）と（イ）を併せても半分に満たず、予想通り低かった。

＜音読テスト＞

実用英語技能検定(以下「英検」と略) ３級程度の約 50 語の英文を用いて、強勢をどのくらい適切に置いて音読ができるかを調べるテストを行った。50 語の英文の中に 10 箇所の強勢チェック箇所（文強勢）を設け、１人ずつ読ませ、正しく読めた箇所の数を調べた。7 割正しく読めることが生徒の最初の目標と考え、優秀、合格、不合格がわかるように得点分布を３つに区切って右の表にまとめた。

テスト１回目結果　　平均 5.2 点（10 点満点、79 名）
7 点以上　18%（79 名中 14 名）

1回目得点分布

得点	人数	%
10～9	2	3
8～7	12	15
6以下	65	82

改善の目標

・英文のどこに強勢を置いて読んだらよいかがわかる生徒（注）が全体の７割以上になる。

・初めて見る英検３級程度の英文でも、英語の強弱リズムを意識して、7 割以上適切なリズムで読める生徒が全体の７割以上になる。

（注)「わかる生徒」とは、アンケートで「(強弱リズムの知識を）かなり持っていると思う」と「少し持っていると思う」と回答した生徒である。

改善のための手だて

・文強勢の基本的知識に関わる指導をすれば、英語を読むときにも適切な強勢が置けるようになるだろう。

・強勢を意識して読む練習を繰り返し行うことで、初見の英文でも意識せずに適切な強勢を置いて読めるようになるだろう。

＜知識面の強化＞

機能語・内容語という区分、および基本的に内容語に強勢が置かれるということをハンドアウトにまとめて生徒に学習させる。

＜音読テスト＞

生徒のパフォーマンスの伸びを調べるため、研究期間終了時にも 10 点満点の音読テストを実施する。また、１回目と２回目の中間の時点で、生徒の意識づけを強化する目的も兼ねて、生徒同士（ピア）で同様のチェックを行わせる。

＜教科書１文取り出し練習＞

教科書本文の音読練習前に、１文を取り出して、強勢を特に意識した練習を全員で行う。取り出した英文を板書し、強勢箇所を生徒に選ばせたのち、一斉に声に出して練習させる。また、１文を印刷した紙を配布し、強勢を置く場所を単語単位で選ばせる練習も行う。

＜童謡・早口言葉＞

授業のはじめの帯活動（5 分）として、強勢を意識しながら英語の童謡や早口言葉を読む練習をする。具体的には以下の方法で行う。

①教師が強勢の部分で黒板をたたく

②教師がカスタネットを使う

③教師がまりつきの要領でゴムボールを弾ませる

④生徒が立ったまま足踏みを行う

⑤生徒が胸の前にあげた手を波のように動かす

生徒の変化（途中経過・事後の検証結果など）

１．生徒の取組状況

＜教科書１文取り出し練習＞

練習を始めた当初は強勢箇所がほとんど選べなかったが、約２ヶ月後には、ほぼ適確に選んでいるという印象を得た。

＜童謡・早口言葉＞

約１ヶ月間、童謡の“Rain, Rain, Go Away”や早口言葉の“Peter Piper”などを使って実施したが、生徒は活動の意図を十分に理解して、はじめから興味をもって練習をしていた。研究期間の後半では、スムーズに練習に入ることができ、生徒のリズムの習得も早くなっていた。

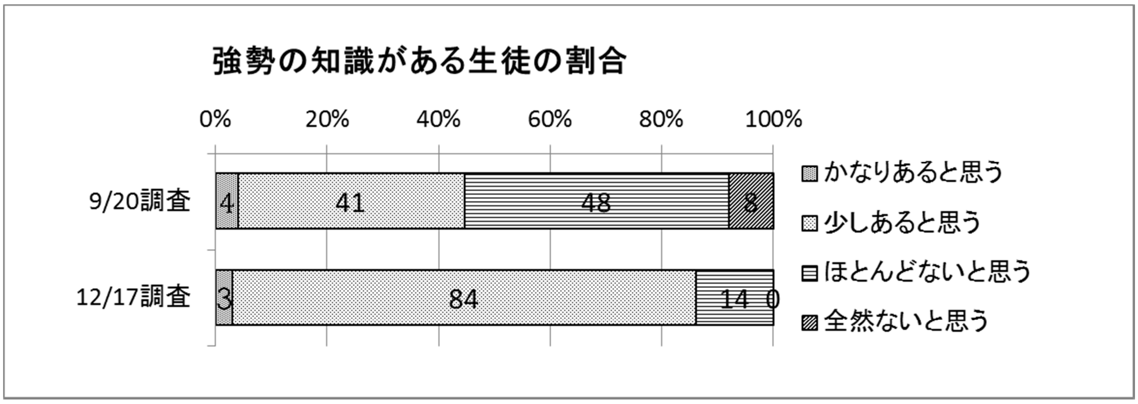
早口言葉を使った練習では、クラスの早口ナンバーワン・コンテストもやったところ、大いに盛り上がった。

２．事後の検証

＜強勢の知識の変化＞

アンケート２回目結果

質問：「英語を読んだり話したりするときに、基本的にどこを強く読みどこを弱く読めばいいかということを知識として持っていますか。」



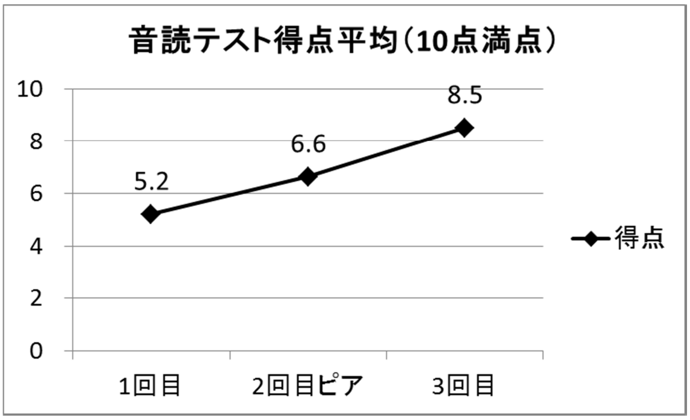
「かなり（知識が）あると思う」「少しあると思う」を合わせると 87%になり、改善の目標「英文のどこに強勢を置いて読んだらよいかがわかる生徒を全体の７割以上とする」は達成されたと言える。

＜音読の変化＞

１回目の音読テストの平均は 5.2 点(79 名)であったが、２ヶ月後の３回目には 8.5 点となった。また、１回目と２回目の中間の時点で行った生徒同士（ピア）のチェックによる得点の平均は 6.6 点であった。

3回目得点分布

得点	人数	%
10～9	44	56
8～7	28	35
6以下	7	9



「７割以上適切なリズムで読める生徒」は 72 人（91%）になり、改善の目標「全体の７割以上」は達成された。また、全体の平均点は 3.3 点上昇した。

教師の変化

昨年度までは、英語の強勢に関して一定期間継続して指導を行ったことはなかった。指導方法にも通じていなかった。しかし、本研究を通じて、少しではあるが有効な手だてが見えてきた。また、授業で取り上げることで、自分自身曖昧だった強勢の基本について理解を深めることができた。生徒たちに対して、さらに文強勢以外の音声面の指導も充実させていこうという気持ちが強まった。

今後の課題（次の改善点など）

生徒の強勢パフォーマンスを測定するために英文の音読テストを行ったが、実施に際し、問題点も浮かび上がってきた。第一に、生徒の強勢をどの程度で可としどの程度で否とするかの基準を、同じ採点者でもぶれないように設定することができず、主観や感覚に頼らざるをえなかったということである。１人の採点者でも困難なのだから、採点者が異なる場合にはテストの信頼性を確保することが一層困難になると予想される。第二に、同じ１人の採点者でも、テストの実施間隔が長くなると、判断の基準がずれるという可能性があるということである。今回の 2 回のチェックテストでは数ポイントの得点上昇という結果が出ているが、その数値の信頼性が十分だとは限らない。どのようなパフォーマンスチェックの方法にすればより信頼性と客観性を持たせられるかが今後の課題である。

まとめ・感想

音読の重要性については日頃から生徒に伝えるようにしている。そして英語Ⅰ・Ⅱの教科書本文について、CD のモデル音声をまねながら練習するように言っている。しかし数年前に、「ただまねよと言っても生徒たちは何をどうまねたらいいかわからないのではないか」ということに気がついた。そこで、教室でモデル音声を聞くときに、音声上の聞き取りのポイントを少しずつ取り出して指導し始めた。しかし昨年、強勢やリズムの指導がまだ不十分であったことを再認識した。日本語と英語の音声上の特徴で大きく異なる点の１つが、強勢とリズムであることは間違いない。今年度研修の機会を得て、授業改善のテーマの候補として真っ先に頭に浮かんだのが、この強勢とリズムの問題であった。

研究を通じて、強勢指導のためにいろいろ考えていたことを実際に試すことができ、自分が使いやすい方法もわかったことが有益だった。派生的に音読指導の方法について学び直すこともできた。時間がかかるので敬遠していた生徒一人ひとりの音読をじっくり聞く機会ももつことができた。今後は、強勢の指導方法の改善はもちろん、最終的にスピーキング力の向上へもつながる指導の道筋を考えていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

米山朝二. (2003).『英語教育指導法事典』研究社

白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則. (2011).『改訂版　英語教育用語事典』大修館書店

鈴木寿一・門田修平. (2012).『英語音読指導ハンドブック』大修館書店

安木真一. (2010).『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法 54』明治図書出版

生徒を励ます長文読解指導

科目名	英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・28 人編成（男子 9 名　女子 19 名）の習熟度別発展クラスで、雰囲気は大変和やかである。比較的熱心に学習に取り組む生徒が多い学年で、当該クラスの生徒はそのなかでもかなり向学心が強い。ただし、自力で何かをやり遂げるというよりは、教師に支えてもらいながら取り組むことにやりがいを感じる生徒が多い。

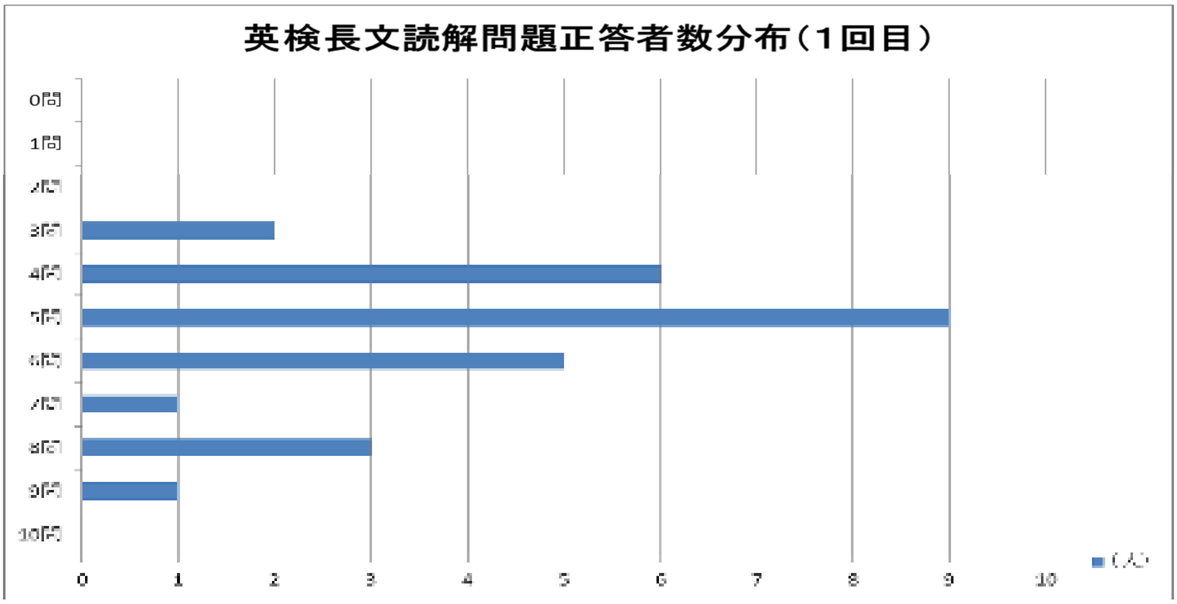
・50%近くの生徒が四年制大学への進学を考えている。しかし、そのほとんどが指定校推薦や公募制推薦、AO 入試での受験を希望しているため、一般入試を意識する生徒はあまりいない。その他の生徒の進路希望は、短期大学や専門学校、就職など多岐にわたっている。

解決すべき課題

語彙レベルが中学卒業程度の英文でも、長文になるとそのボリュームを見て読解をあきらめてしまったり、意欲を失っていてはじめから読まなかったりする傾向がある。そのため、生徒に読解の成果がわかるような形で長文読解の練習をさせて、達成感を味わわせ、自力で英文を読む自信につなげていく必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

英検３級の長文読解問題２題（設問数 10 問）を制限時間 20 分で行った。結果は以下のとおりである（受験者数 27)。



平均正答数は 5.4 問で、7 問以上正答した生徒は 5 名であった。日頃の授業では英文読解よりもむしろ語法・文法に重点を置いた英文解釈を主として行っていた。そのため、生徒にとって、英文を読むということは、その内容や筆者の意図を自力で理解するというよりは、教師の説明によって文構造を理解しながら 1 文ずつ日本語に訳すという作業になってしまっていた。このような環境のもとで学んできたことが大きく起因していると思われるが、多くの生徒が長文を目にして、教師の援助なしに取り組まなければならないことに戸惑いの表情を浮かべていた。読解途中にあきらめたり、開始と同時に思考停止状態に陥ったりする生徒が続出した。

改善の目標

・英検 3 級の読解問題 2 題（設問数 10 問）のクラス全体の正答率を 7 割以上にする。
・クラスの 5 割以上の生徒が読解活動に対して肯定的な態度で取り組むようになる。

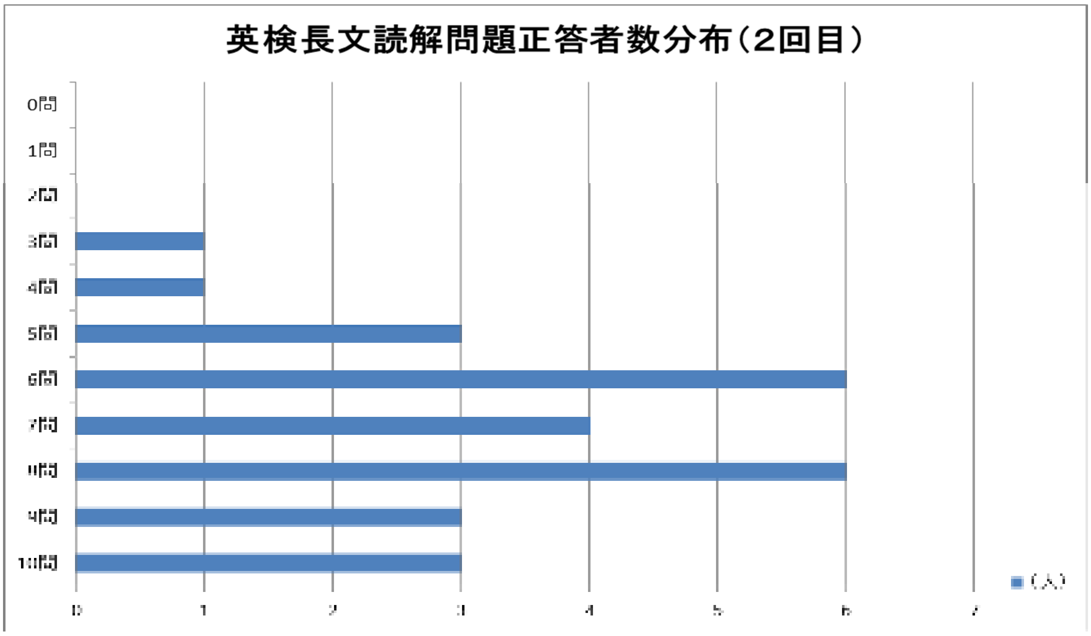
改善のための手だて

・教科書本文について、時間制限を設けてスキミング、スキャニングの活動に取り組ませれば、日本語訳なしに英文を理解する練習になり、より内容理解に注意を向けさせることができるだろう。
・定期的にテスト形式で教科書以外の長文を読む練習をさせれば、教師の支援なしに英文を読むことに慣れ、初見の英文に取り組もうとする自信を高めることができるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

一定時間内に自力で英文を理解する、という目的を明らかにして活動に取り組ませたこともあり、生徒は意欲的に読解活動に取り組んでいたようだ。教科書の読解活動も、週１回の教科書以外の読解練習（TF 形式の設問）も、成果が点数に表れるため、生徒は毎回の活動を楽しんでいたようだ。活動に慣れてくると徐々に正答数が上がり、それが少しずつ自分の自信へとつながっていく様子が、表情や授業態度に顕著に表れていた。

約１ヶ月の読解活動を経て、英検３級の読解問題２題を１回目と同じ方法で実施した。結果は以下のとおりであった。なお、今回も１名欠席のため、27 名での受験となった。



平均正答数は 7.1 問で、7 問以上正答した生徒は 16 名であった。１回目と比べ大幅にスコアが上がり、事前に設定した目標値をクリアすることができた。正答数が 7 問以上の生徒も、クラス全体でおよそ 6 割を占めるまでになった。受験中の生徒の様子は１回目とはまるで異なり、長文と対峙しても臆することなく、全員が最後まで集中して英文を読んでいた。試験終了後は「すごく疲れたけれど、読み切れたことが何よりも嬉しい」と声をあげ、生徒たちは清々しい表情を見せていた。

後日、授業に対する感想を自由記述形式で生徒に書かせた。その中で、読解活動に関する感想をまとめたところ、以下のようになった。

・英文を自分の力で読み切れるようになって嬉しい。(6 人)
・以前よりも集中して英文を読めるようになり、読むスピードが上がったと思う。(6 人)
・英文を読むことが楽しくなってきた／授業が一層楽しみになった。(5 人)

およそ 6 割の生徒が読解活動に関する感想を書いており､そのすべてが肯定的な感想であった。クラス全体で 7 割の生徒が２回目の英検のテストでスコアが上がっており、このことが生徒に達成感や充実感をもたらしたものと考えられる。

<u>教師の変化</u>

・目標を立てて授業をおこなうことで、より密度の濃い授業展開ができるようになった。
・今まで以上に教材研究に時間をかけるようになった。
・単なる知識の集積でなく、生徒の論理的思考力を鍛えることに一層主眼を置くようになった。

<u>今後の課題（次の改善点など）</u>

・引き続き読解活動に注力し、生徒の意欲を引き上げていきたい。

<u>まとめ・感想</u>

もともとやる気に満ち溢れたクラスであるが、ここまで読解活動に意欲を発揮してくれるとは思わなかったので、うれしい驚きであった。「自分にもできるかもしれない」という気持ちを抱かせることがいかに大切かを、この研修プログラムを通して身を持って知ることができた。また、「先生が頑張っているから／先生の授業が好きだから」という外発的動機からやる気を起こしてくれた生徒が多数いたこともうれしかったが、それが内発的動機につながる様子を見られたことがさらに励みとなった。教師側の情熱や愛情が生徒の能力向上に大きく影響するということをあらためて感じることができた。

論理展開を意識したパラグラフリーディングの指導

科目名	異文化理解	学 年	3	形 態	ＨＲ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

国際科３年「異文化理解」の 4 クラスにおいて実施した。各クラス 16 名ほどの小人数授業であり、女子の割合が多い。英語が好きで入学してくる生徒がほとんどなので、英語に対する学習意欲は旺盛で、授業に臨む態度は真剣である。ただし３年次になり生徒間の「英語力格差」も顕著となってきた。

解決すべき課題

難関私立大学への進学を希望する生徒が多く、1000 語レベルの「超長文」と呼ばれる英文を制限時間内に速く正確に読む力が要求される。そのためには論理的かつ抽象度の高い英文についてパラグラフレベルで要点を押さえ、英文全体を通した筆者の考えや主張を理解できなければならない。また、設問解答についても本文の内容に照らし合わせて検証しつつ素早く正確に解答しなければならない。大学入試レベルの英文はどれもアカデミックな内容であり、日頃から背景知識を増やし現代社会の諸問題に対する自分の定見を持っていることも必要である。

以上の点をふまえ、生徒の精読力と速読力をバランスよく伸ばしていく必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

＜9 月時点＞

57 名の生徒に 994 語の英文と 10 問の設問からなるテスト（30 分）を実施した。正答率は全体で 58．9%であった。問題構成は、選択式空欄補充問題 4 問、選択式内容一致問題 4 問、記述式日本語訳問題 1 問、本文中で使われている比喩表現が表す内容を具体的に説明させる記述式問題が 1 問である。この中で特に正答率が低かったものが、日本語訳の問題（正答率 21%：12 名）と比喩表現の内容を説明させる記述式の問題（正答率 1.7%：1 名）であった。

結果と解答解説を通じて、生徒の多くが、「木を見て森を見ず」のような読み方をしており、一文一文の意味はある程度理解するが、パラグラフレベルで要点をつかむ力がまだ足りないことがわかった。テスト後にパラグラフごとの要点を確認するプリント教材を作成し、取り組ませてみたが、誤答が目立った。また、設問解答の根拠をたずねても「なんとなく…」であるとか「本文

中に出てきた表現が選択肢に使われているから」といった回答が目立ち、「フィーリング」で英文を読もうとしていることがうかがえた。きちんと論理展開を追って読む姿勢に欠け、抽象的な内容の英文を読むのも苦手である。解説の際、設問解答にあたり重要かつ難解な英文については注をつけ、時間を取って日本語訳をさせながら内容理解の確認をしたのだが、直訳してみたものの全体の流れの中でどういう意味を持つ英文なのか理解していない生徒が多く、深く読み込めていない様子がうかがえた。

改善の目標

1000 語レベルのまとまった英文を 30 分以内（設問解答含む）に読み、70%以上の正答率で設問に解答できる生徒がクラスの 7 割になる。

改善のための手だて

・パラグラフ展開を把握するプリント教材を作成し指導すれば、パラグラフを意識したリーディング力が向上するだろう。
・読むときに(1)マーキングや(2)パラグラフメモを行う指導を徹底することで、論理展開を視覚的に理解できるようになり、英文全体の構成を意識したリーディング力が向上するだろう。
・抽象度の高い英文についてはペアワークなどを取り入れ、話し合いや意見交換を通して、本文の中でどのような意味を持つのかを具象化する作業をさせることで､精読力が向上するだろう。
・解答解説プリントに取り組むなかで設問に対する(3)リーズニングを行う指導をすることで、根拠をもって設問に解答する力がつき、精読力も向上するだろう。
・背景知識と語彙力増強用に使用している教材（『リンガメタリカ』Z 会出版）と授業で扱う英文の内容をなるべくリンクさせることで、使用教材に対する学習意欲と目的意識が向上し、背景知識の充実につながるだろう。

(1)マーキング…長い英文の中の論理展開や時系列などを視覚的に把握しておくために、ディスコースマーカーや固有名詞、時間や場所を表す語句をマークしておくこと。
(2)パラグラフメモ…各パラグラフの要点を余白に簡単なメモの形で書き込んでおき、英文全体の構成を視覚的に把握しやすいようにしておくこと。設問解答にあたり、すぐに選択肢と本文を対照できるようにしておくのが目的である。
(3)リーズニング…設問を解く際に、選択肢と本文の内容を対照し、なぜその解答になるのかを明確にすること。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

１１月下旬に実施したテストとほぼ同じ条件で英文読解のテストを実施した。語数は 997 語で設問数は 11 問､解答者は 58 名である。正答率は全体で 82.３パーセントと前回に比べ向上した。

また、12 月初旬に授業で行ってきた活動に関するアンケートを実施した（回答者 53 名）。結果（抜粋）は以下のとおりである。

【質問項目】　※）小数点第２位以下切り捨て

① マーキングの練習について、英文の構成を理解することに役立っていると思うか。
そう思う…32.1%　まあまあそう思う…52.8%　そう思わない…9.4%　無回答…5.7%

② パラグラフ展開確認のプリントについて､英文の構成を理解することに役立っていると思うか。
そう思う…37.7%　まあまあそう思う…52.8%　そう思わない…1.9%　無回答…7.5%

③ リーズニング(話し合いも含めて)について、設問解答の正答率向上と精読力向上に役立っていると思うか。
そう思う…28.3%　まあまあそう思う…58.5%　そう思わない…7.5%　無回答…5.7%

アンケート結果から、生徒が英文を推論・分析しながら読もうとする意識を持つようになったことが推測される。また、授業中の観察から多くの生徒が漫然と英文を読むのでなく、マーキングやパラグラフメモを行いながら、論理展開を意識して英文を読むようになったと感じられた。生徒とのやり取りから、特に指示をしなくても意識してリーズニングを行う生徒が増えていることがわかり、解答の根拠も明確に答えられるようになってきたように思われる。

教師の変化

今回の授業改善の目標は、生徒がパラグラフ展開を意識した精読力と速読力をバランスよく伸ばしていくことであった。問題点を分析し、課題や目標が明確になったことで、授業改善の手だてを具体的に考えるようになった。パラグラフ展開の確認作業をするためのプリント教材の工夫や、解答解説のプリントに、重要な英文の意味を推測したりリーズニングの作業をする欄を設けたりするなど､改善を加えた。また､ペアワークを通した意見交換や話し合いを取り入れるなど、授業に変化を持たせるよう工夫をするようになった。現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するための具体的な手だてを、その効果を予想しながら講じることで、授業改善に努めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

考案したすべての活動を授業時間内に行うのは英文の長さによっては無理がある。その日の授業のテーマを絞りメリハリのある授業展開を心がける必要があるだろう。また、今回実施したアクションリサーチによる授業改善は、わずか２ヶ月ほどの実践にとどまったが、３年間または各

学年の学習到達目標に基づいて、その達成のために長期的に実施していくことが必要であり、またさらに効果的であると思う。

今回アンケートを取って現状を細かく理解することができたので、今後もアンケートなどを活用しつつ生徒のニーズをしっかり把握し、生徒とのコミュニケーションをとりながら、教師と生徒とのインタラクションを重視した授業展開を心がけたい。

まとめ・感想

今までいかに感覚的に授業改善に取り組んできたかと考えさせられた。アンケートや生徒に課した課題の分析などを通して､授業中の生徒の反応からだけでは見えなかった課題も見えてきた。できる限り客観的に現状を把握し、授業改善を行うことで今までよりも、短期間でより大きな効果が得られたように思う。また、指導の一つひとつがどのような効果を目指したものか生徒に説明しやすくなり、生徒と教師が目標を共有しやすくなったように感じる。

授業改善にあたって参考にした資料等

中澤幸夫. (2006).『話題別英単語リンガメタリカ』Z 会出版

和田稔(監修)・JEC 英語教育研究会. (2008).『リーディングパワー 発展編』数研出版

和田玲. (2010).『論理を読み解く英語リーディング』アルク

速読力向上のためのリーディングストラテジーの指導

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象クラスは、3 年生 2 クラス（計 79 名、男女比はほぼ 1:1）で、ほぼ全員が大学進学を希望している。

解決すべき課題

長文問題を制限時間内に解くことができず、「英文を速く読めるようになりたい」と希望している生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・英語Ⅰ、Ⅱ、リーディングにおいて、従前は、内容理解や文法解説、ボキャブラリーやフレーズ習得に重点をおいた授業を展開してきた。今年度 6 月に、速読に特化した授業を行い、生徒の意識（アンケート）とリーディングスピードを調べたところ、次のような結果となった。

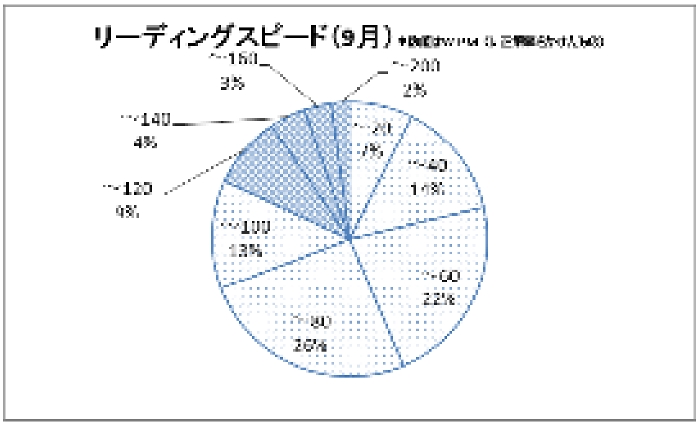
「授業の進め方は従来方式が良いか、速読方式が良いか」

従来方式が良い	速読方式が良い
11 人 （15%）	61 人 （85%）

「英文を速く読めるようになりたいか」

非常にそう思う	思う	思わない	全くそう思わない
63 人（88%）	9 人（12%）	0 人（0%）	0 人（0%）

リーディングスピード（9 月：調査開始時）



＊WPM100 以上の生徒の割合は 18%
（グラフ中の「～100」は、100 を含まない）

改善の目標

WPM100 以上の生徒が 6～7 割以上になる。

＊ここでは WPM を、「1 分間に読んだ単語数×設問正答率」と定義した。

改善のための手だて

(1) 速度を計測した速読練習をくり返し、成果を記録させれば、英文を速く読むことに慣れ、動機づけも高まるだろう。

・黒板にマグネットシート（経過分・秒を示す数字を書き、計測しながら矢印で経過時間を示していく）を貼り、読了後に黒板を見ればかかった時間がわかるようにする。

・「速読シート」に WPM の値とグラフを記録させ、伸びが実感できるようにする。

・計測することで、競争心を刺激し、入試の緊張感に慣れさせる。

(2) リーディングストラテジーを指導すれば、より注意して読むようになり、読みの効率が上がるだろう。

・リーディングストラテジーにかかわるアドバイス（「トピックセンテンスを探す」「タイムラインに注意する」「読みながらディスコースマーカーにマークする」など）を与え、漫然と読むのではなく、意識を持って読むことに慣れさせる。

(3) ボキャブラリーを増強すれば、速く正確に読めるようになるだろう。

・初見の英文を読むことに慣れさせるため、語彙調べなどの予習は要求しない。その代わり、復習を徹底するために、毎回授業のはじめに、前回英文の語彙テストを行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

＜生徒の取組状況と新たな対策＞

毎回、リーディングストラテジーを意識したアドバイスを与え、それを意識しながら読むように指導したが、その場限りの意識にしかならず、定着が見られなかった。そこで思い切って以下の２つにしぼり、それを無意識に行えるようになるまで何度も板書、伝達をくり返した。

アドバイス１：チャンクで読み、後戻りしない。

アドバイス２：なるべく英語のまま理解する（日本語にしない）。

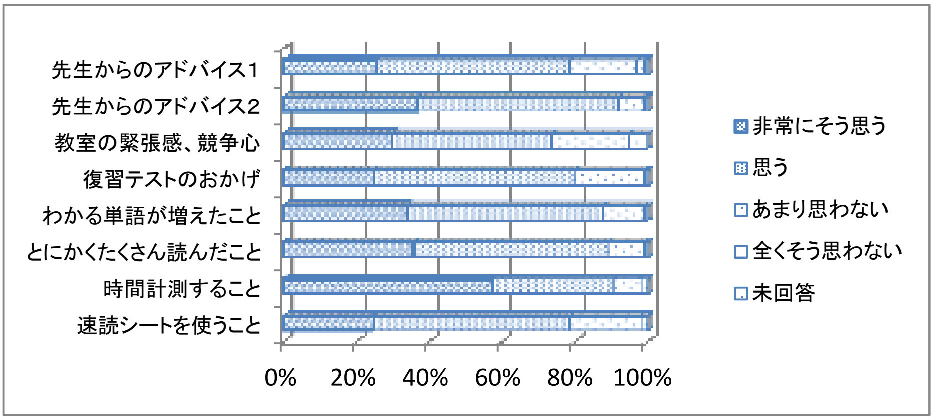
＜生徒の意識調査：１０月＞

今後の方針決定のために、中間のアンケート調査を行った。

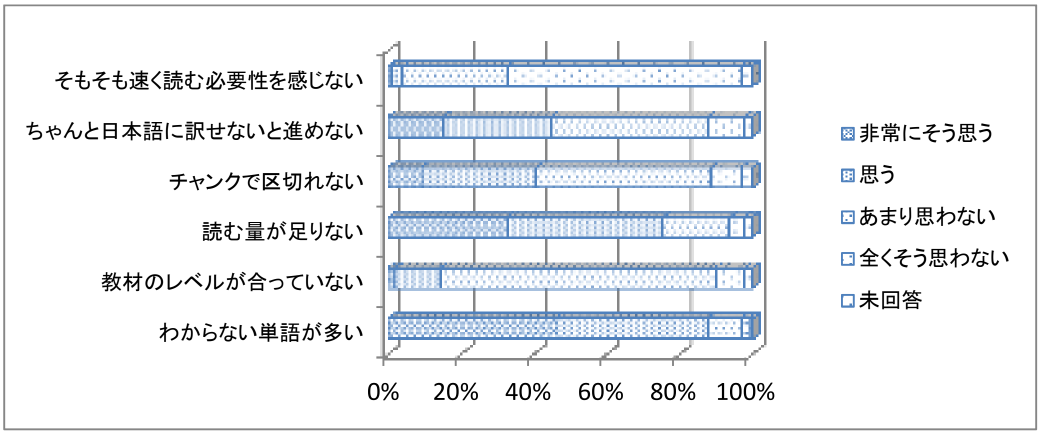
Q１．速読トレーニングを通して読む速さが上がったと思うか。

非常にそう思う	そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	未回答
27 人（28%）	55 人（57%）	14 人（15%）	0 人（0%）	3 人（3%）

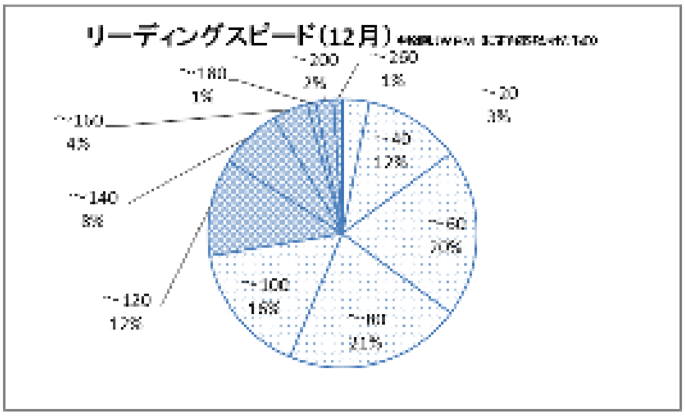
Q２．速く読むうえで、何が役に立っているか。



Ｑ3．速く読むうえで、まだ障害になっていることは何か。



＜リーディングスピードの調査：１２月＞



＊WPM100 以上の生徒の
割合は 28%
（グラフ中の～100 は、
100 を含まない）

WPM の伸びは見られたが、目標達成には至らなかった。理由として、生徒の速読力の伸びに対する予測の誤りと、期間の短さが挙げられる。また、設問正答率を係数としてかけると、設問の難易度によってかなり WPM 値が左右されるためか、恒常的な伸びが見られなかった。

また、速読力向上のためには語彙指導が重要だと思い、力を入れてきたが、多くの生徒がまだ「語彙不足が速読力アップを阻んでいる」と感じていた。教科書などの限られた語彙について、従前の語彙指導をしているだけでは速読力の向上に直接的な大きな効果は期待できない。速読のストラテジー育成に寄与するような語彙指導（文脈や接辞などを手掛かりに新語の意味を推測させるなど）も考えていく必要があるだろう。

＜生徒の意識調査：１２月＞

Ｑ1．速読トレーニングを通して読む速さが上がったと思うか。

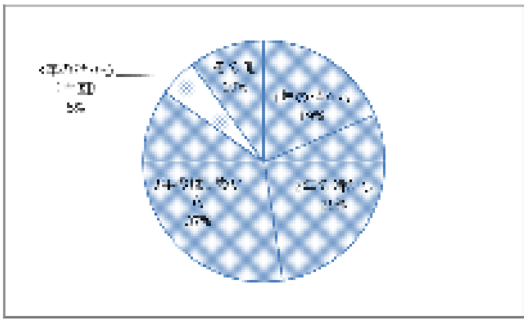
非常にそう思う	そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
21 人（31% ）	37 人（55%）	9 人（13%）	0 人（0%）

Ｑ2．速読トレーニングは英語力をつけるのに役に立つと思うか。

非常にそう思う	そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
30 人（45%）	31 人（46%）	6 人（9%）	0 人（0%）

リーディングスピードの目標は達成できなかったが、アンケートでは、「読む速さが上がったと思う」「速読トレーニングが英語力アップに役立つと思う」という回答が非常に多かった。

Q３．このトレーニングをいつから始めたかったか。



95%の生徒が、より早期からのトレーニング導入を希望しており（「その他」も、すべて今回より早い時期を希望)、今後の授業計画を考える上で参考となる結果となった。

教師の変化

・はじめは、生徒の速読スピードという数字を調査対象としてみなすことに若干の抵抗感があったが、研究が進むにつれ、明らかに授業が変化し、生徒の集中度や力に変化が見られた。生徒の学習状況や能力を分析し、その向上のための方策を練り実践することの重要性を認識した。
・この研究でさまざまなことを試みるなかで、「英語による授業」を行う自信がついた。
・生徒の能力を短期間で伸ばすのは難しいので、年間のゴールを定めることや、あるいは年度を越えたスパンで計画を立て、実施することの重要性を再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

・速読指導の開始時期、英文の質や量の検討が必要である。早期開始を望む生徒が多い一方、「２年までは本気にならないから意味がない」という正直な意見も多く、考えさせられた。生徒の進路実現のため、部活動や行事の中心となる２年生の時期にどれだけ受験を意識して学習させるかが、本校の大きな課題であると思う。学校全体で対処していきたい問題である。
・語彙指導については、短期間に効果をあげるのは困難である。長期的な展望を持った指導方法を工夫したい。
・いかに授業外の部分で効果的に学習させるかを工夫したい。
・「速く読める」ということの科学的なメカニズムの理解を深めたい。
・音読、シャドーイング、英作文など、今回試さなかったさまざまな活動と、「速く読める」こととの関係性を調べる研究をしてみたい。

まとめ・感想

自分の授業を見直しながらデータによって生徒の力を分析することの重要性と、自分の未熟さに気づかされた１年間であった。何よりも、生徒の反応をもとに次の方法を考えることが楽しくやりがいがあった。また、同様の課題を持つ他の教師との情報交換が非常に大きな刺激になった。この研修で得た知識や技術を生かして、勤務校や地域の英語教育の活性化に貢献していきたい。

最後に、この研究以外でもさまざまな面でサポートしていただいた国際言語文化アカデミアの先生方、この研修の受講にご理解ご協力をいただいた勤務校の先生方に深く感謝申し上げる。

授業改善にあたって参考にした資料等

Beatrice S. Mikulecky & Linda Jeffries (2005). READING POWER THIRD EDITION. NY: Pearson Education

速読活動によるリーディング授業の改善

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

3 年間クラス替えはないが、3年次では進路に応じ、選択科目を中心としたレッスンクラスが展開されている。当該クラスは男子 32 人、女子 8 人の計 40 人の理系クラスであり、全員が大学進学を目指している。クラス全体に活気があり、明るい雰囲気である。ほとんどの生徒がしっかり声を出して音読することができる。

解決すべき課題

文法解説をまじえて 1 文ずつ日本語にしながらパラグラフの主題を理解させる授業を行っている。毎回ほとんど同じ授業展開のため、授業に臨みやすいと言う生徒もいる一方で、メリハリのない授業になっていると言わざるをえない。また、表面的な訳読式の授業では、内容を深く理解し、かつ、なるべく速く読むという力を身につけさせることができず、大学入試問題にも対応できない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

＜授業改善アンケート：7月＞

１．これまでの授業･授業内容･自主学習について

①授業の楽しさ

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえばつまらない	つまらない
6 人(15.6%)	17 人(44.7%)	12 人(31.6%)	3 人(7.9%)

②授業内容

ほぼ理解できている	まあ理解できている	あまり理解できていない	理解できていない
14 人(36.8%)	20 人(52.6%)	4 人(10.5%)	0 人(0%)

③自主学習

よく頑張っている	まあまあ頑張っている	あまり頑張っていない	頑張っていない
2 人(5.3%)	22 人(57.9%)	11 人(28.9%)	3 人(7.9%)

２．授業内容・授業中の活動の好き嫌い

	好き	わりと好き	あまり好きでない	嫌い
①単語テスト	12 人(33.3%)	14 人(38.9%)	7 人(19.4%)	3 人(8.3%)
②単語(派生語)の詳しい説明	13 人(31.0%)	19 人(45.2%)	3 人(7.1%)	1 人(2.8%)
③教科書本文の日本語訳	10 人(27.8%)	12 人(33.3%)	11 人(30.6%)	3 人(8.3%)

④教科書本文の詳しい説明	10人(28.6%)	17人(48.6%)	7人(20.0%)	1人(2.9%)
⑤音読(スラッシュリーディング)	8人(22.2%)	14人(38.9%)	9人(25.0%)	5人(13.9%)
⑥音読(オーバーラッピング)	10人(25.0%)	18人(45.0%)	7人(17.5%)	5人(12.5%)
⑦ペアリーディング	3人(8.3%)	19人(52.8%)	8人(22.2%)	6人(16.7%)
⑧ディクテーション	9人(26.5%)	16人(47.1%)	6人(17.6%)	3人(8.8%)
⑨文法問題	15人(41.7%)	14人(38.9%)	5人(13.9%)	2人(5.6%)
⑩イディオム・重要構文テスト	12人(33.3%)	14人(38.9%)	8人(22.2%)	2人(5.6%)
⑪単語（語法･例文）の詳しい説明	13人(36.1%)	18人(50.0%)	5人(13.9%)	0人(0%)
⑫英語の学習法･暗記法の説明	14人(38.9%)	15人(41.7%)	6人(16.7%)	1人(2.8%)
⑬英文読解のテクニック･コツ	18人(50･0%)	12人(33.3%)	6人(16.7%)	1人（2.8%）
⑭易しい英文を使った速読演習	13人(36.1%)	15人（41.7%）	7人（19.4%）	1人（2.8%）
⑮補助プリントによる入試問題演習	13人(36.1%)	18人（50.0%）	4人（11.1%）	1人（2.8%）
⑯入試頻出テーマの一般知識の伝授	22人（61.1%）	12人（33.3%）	1人（2.8%）	1人（2.8%）
⑰英文構造のていねいな解説	17人（45.9%）	16人（43.2%）	4人（10.8%）	0人(0%)
⑱センターリスニング演習	15人（40.5%）	13人（35.1%）	5人（13.5%）	4人（10.8%）
⑲基本的英作文の練習	16人（44.4%）	10人（27.8%）	5人（13.9%）	5人（13.9%）

（まとめ）

生徒は活動に対して好意的であり、特に語彙に関する知識（②⑪）、英文理解を助ける知識（⑯⑰）についての解説を求める傾向も推察された。速読活動については、77.8%の生徒が「好き」「わりと好き」と回答し、授業で重点的に扱ってもついてくるだろうと判断した。

＜速読の目標について＞

生徒が受験したい国公立大学や中堅私立大学のセンター利用入試に必要な大学入試センター試験得点率は8割以上である。また、『英語リーディング指導ハンドブック』（門田他, 2010, p. 235）には、日本人高校生の場合、WPM100～150を目標の目安として練習するのがよいとの報告が引用されている。そこで、そのほぼ中間であるWPM130を目標にすることにした。

<u>改善の目標</u>

大学入試センター試験レベルの長文（300～350語）をWPM104（130×設問正答率8割）以上で読める生徒がクラスの8割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

概要や要点をつかみながら長文を読む練習をすれば、論理構造を把握しやすくなり、より速く正確に読むことができるだろう。

・長い文章を読む際に、スキャニングやパラグラフリーディングなどのリーディングスキルを意識させる。
・ディスコースマーカーに注意して英文を読ませる。

＜教科書本文を使った活動＞

① 閉本してリスニングと各段落の要約

② 開本してスキャニング（教科書設問）

③ 新出単語確認

④ 読解活動

・教科書を閉じて１セクションのリスニングをさせた後、段落ごとに日本語で要約をさせる。

・新出単語の確認、本文読解の前に、スキャニングの活動（英問英答）として、各パートに設定されている問題に取り組ませる。

・本文の読解では、まずトピックセンテンスを探させ、そのあとで支持文や結論文を読ませてパラグラフの要旨をつかませたり、ディスコースマーカーに下線を引かせて、文と文との論理的つながりを考えさせたりする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

＜速読演習の実施方法と取組状況＞

９月から１月まで計 10 回、授業の最初に実施した。先に学習記録シートを配り、前回までの記録を確認した後に、5 分以内で、長文問題に取り組ませた。毎回 WPM×設問正答率を計測し、学習記録シートに記入させた。生徒は集中して取り組み、記録時には生徒同士の振り返り、話し合い、競い合いの様子が見られるようになった。

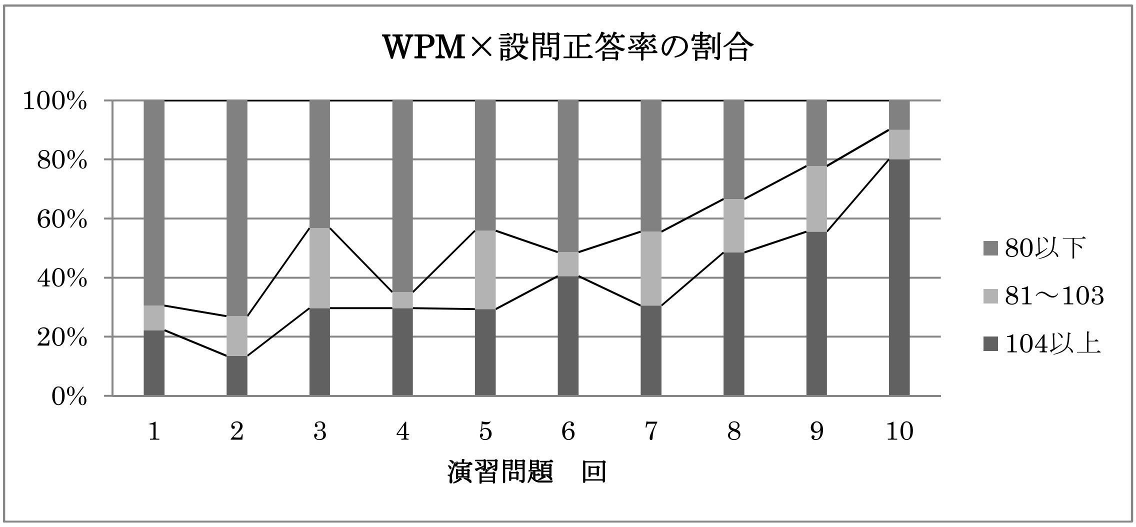
＜WPM 値の測定結果＞

・第 1 回目で計測した WPM×設問正答率が 104 以上の生徒は 8 人しかいなかった。80 以下の生徒は 24 人もいた。

・１２月上旬に行った第 8 回目の速読演習では、104 以上の生徒が 16 人、80 以下の生徒は 10 人となった。

・１２月中旬の第 9 回目の速読演習では、104 以上の生徒が 33 人中 11 人、80 以下生徒は 3 人となった。

・１月に行った最後の速読演習では、欠席者が多く 10 人しか受けていないが、104 以上の生徒が 8 人、80 以下の生徒は 1 人となった。



・検証対象として予定していた最終回は、生徒数が少なかったため、検証期間内（９～１月）

における生徒全員の最高記録を見たところ、自己最高 WPM (×設問正答率) 80 以下の生徒は 7%、81～103 の生徒は 10%、104 以上の生徒は 83%であった。個人内最高記録で見れば、改善の目標は達成したといえる。

教師の変化

生徒の反応を予想して教材研究をするようになった。また、授業中も生徒の反応によって指導のしかたを調整するようになった。さらに、生徒が活動をする際には、その活動がどのような効果があるのかということや、どのような目標に向かってどのように学習すればよいのかを伝えるようになった。何より、「多分この活動は効果があるだろう」というように考えるだけでなく、生徒の現状把握から始めてしっかりと実際の効果を検証しながら、活動や教材を工夫していくというように授業改善を進めることができた。

今後の課題（次の改善点など）

・WPM×設問正答率が 80 以下の生徒に対して、個別指導を行い、弱点を克服させたい。
・学習記録シートに各自の感想や意見を入れる欄を作りたい。
・読んだ後の感想や意見などについて、もっと生徒に英語で自己表現させたい。また導入活動などを中心に、教師の英語によるインプットの場面をもっと増やさなければならない。

まとめ・感想

このアクションリサーチを実行する前は、どうすればよい授業になるのかわからず、ただやみくもに不安を感じるだけであった。今回の研修を受講し、さまざまなアドバイスを取り入れて授業展開や指導方法を改善していった結果、少しずつよい結果が表れるようになった。何か活動をさせる際に、その効果を説明してからさせるだけでも違いが生じることがわかった。生徒に対する声かけの大切さもわかった。

また、生徒は、学習記録シートを見ることで上達していく様子がわかり、自信につながったのではないかと思う。教師が工夫して授業を変えていけば、生徒も変わると実感した。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠志・氏木道人(編著).(2010).『英語リーディング指導ブック』大修館書店
数研出版編集部.(2013). 『大学入試センター試験対策オリジナル予想問題英語プレノート』数研出版
英語問題研究会『改訂版 Reading Gym 英語速読テスト入試編』数研出版
北尾謙治・北尾 S.キャスリーン.(2005).『英文速読ドリル 10minutesLevel2』Z 会出版

パラグラフライティングの指導と自作評価スケール

科目名	ライティング	学 年	2	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象生徒は 3 クラス、合計 58 名である（男女比 6:4）。打ち解けた雰囲気の中、ペアワークなどにもよく取り組む。約 9 割の生徒が大学、短大、専門学校への進学を希望している。

解決すべき課題

「英語で出来事や意見を自由に書く、話す」といった言語活動に慣れておらず、機会とノウハウが十分に与えられていないため、ライティングにおける表現力が不足しているようである。

事前の現状把握

４月当初に行ったアンケートでは、49%の生徒が「英語が好き」と答える一方、「英語が得意か」という問いに対して、70%の生徒が「得意ではない」と回答しており（うち「まったく得意でない」と答えた生徒は 37%)、英語に対して自信を持てない生徒が多数を占めているということをうかがわせた。特に、文法について不安を覚える生徒が多かった。また、「自由に書け」という活動で、「そもそも何を書いたらよいかわからない」という生徒も少なくなかった。

改善の目標

20 分のパラグラフライティングにおいて、英語らしく、おおむね内容が理解できるパラグラフを完成できる生徒がクラスの 8 割以上になる

具体的に、「英語らしく、おおむね内容が理解できるパラグラフ」とは、以下の評価スケールにおいて、合計 7 点以上を得点できるものとした。

語　数	構　成	正確さ
50 語以上…4 点 30 語以上…2 点 15 語以上…1 点 15 語未満…0 点	3 層+ 1　…3 点 3 層　　　…2 点 3 層でない…0 点	大きな誤りのない文が 75%以上…3 点 大きな誤りのない文が 60%以上…2 点 大きな誤りのない文が 60%未満…1 点

※3 層…主題文、支持文、結論文

※3 層+ 1…結論文が特に印象的なもの、主題文の言い換えとして工夫があるもの

※大きな誤り…SV 構造の欠如と時制のエラー（スペリングのエラーは減点せず）

改善のための手だて

・パラグラフ構造をくりかえし指導すれば、読み手にわかりやすい論理的な文章を書けるようになるだろう。

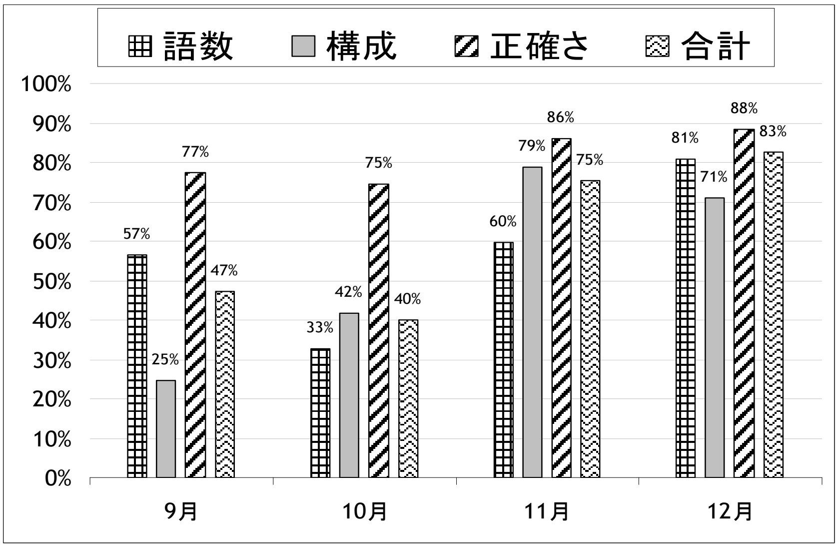
・ブレインストーミング、マインドマップの指導を行えば、書くことを思いつき、文章化するプロセスに役立って語数が伸び、パラグラフを構成する手助けになるだろう。
・生徒の答案にみられる共通する誤りに対するフィードバックを行えば、ライティングにおける英文の正確さを高めることができるだろう。
・定期テストにパラグラフライティングを出題すれば、動機づけが高まるだろう。

生徒の変化

９月から１２月まで、パラグラフライティングを実施し、4 回計測をした。なお、パラグラフライティングの制限時間は書く内容を考える時間も含めて 20 分間である。

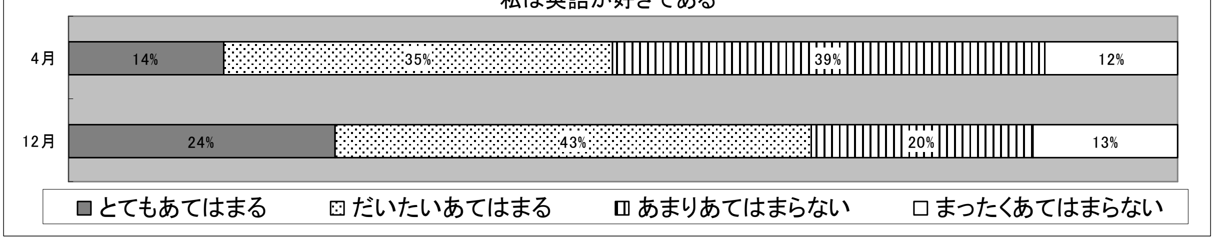
９月：What I Want to Do in Okinawa　　１０月：My Memory in Okinawa
１１月：My Goals and Dreams　　１２月：Using the Internet

採点は前述の評価スケールにしたがって行った。以下は、20 分間のパラグラフライティングにおいて 50 語以上書けた者、3 層構造になっている者、大きな誤りのない文がパラグラフの 75%以上である者、そして合計が 7 点以上の者の推移である。



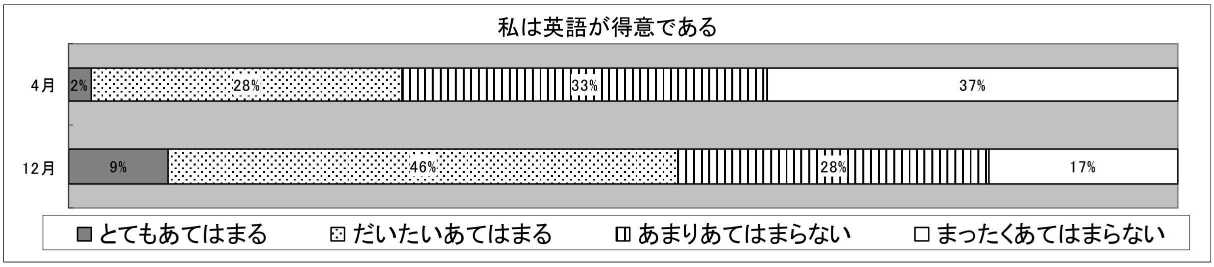
９月で 3 層構造になっている者が少ないのは、多くの生徒が時間内に結論文まで書けなかったためである。構成に関しては、多くの生徒が１２月までに改善を果たした。語数も大きな伸びを示した。評価スケールを生徒に提示し、その都度フィードバックを行ったことが効果的であったように思う。一方、正確さに関しては、微増という結果になった。合計 7 点以上の生徒は９月には 47%であったが、１２月には 83%となり、当初の目標を達成できた。

事前・事後のアンケート結果を比較すると、下のようになった（回答数 58 人：3 クラス）。

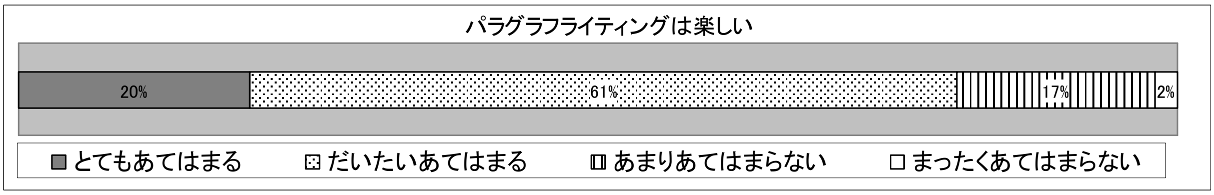


１２月に「英語が好きである」生徒が約 7 割に達したことから、パラグラフライティングによ

る自己表現活動を中心とした授業は､英語への興味､関心を高める一助になったといえるだろう。



「英語が得意である」に対して、１２月には「あてはまらない」と答えた層が減少したことから、生徒の英語に対する自信をおおむね高めることができたといえる。



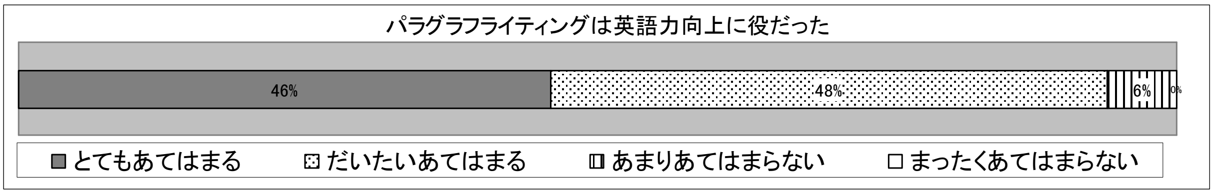
パラグラフライティングを楽しいと感じている生徒は８割に達した。生徒は「自ら考え、判断し、表現する」活動をおおむね好意的に捉えていて、機会さえあれば多くの生徒が熱心に取り組むということがわかった。以下は楽しいと答えた理由である。

・普段の英語は指示された文を訳したり、書いたりするだけだが、エッセイは自分の好きなこと、自分の思っていることを自由に書けるので楽しかった。
・簡単な単語でも文が書けることがわかったから。
・自分の言葉でたくさん書けると達成感があった。

一方、パラグラフライティングを「楽しくない」「難しい」と感じた生徒の意見としては次のようなものがあった。

＜楽しくない理由＞	＜難しい理由＞
・文を考えるのが難しいから。 ・新しく学んだ文法を使えていないから。	・主語や動詞をきちんと考えること。 ・書きたいと思う文が浮かんでも単語がわからなくて書けないときがある。 ・文法を使いこなせないから。

難しいと感じた原因としては、単語、文法知識の不足が主なものであった。また、穴埋めや並べ替えはできるのに､自由英作文では同じ文法事項を使いこなせないという生徒も多くみられた。



９割以上の生徒がパラグラフライティングを通して英語力が向上したと回答している。さらに、「まったくあてはまらない」と答えた生徒は一人もいなかった。「どのような力がついたか」の回答としては、「発想力」、「文法力」、「文章構成のスキル」が目立ち、「コミュニケーションへの自信がついた」というものもあった。

教師の変化

・生徒に身につけさせたい力を念頭に授業を設計するなかで、教科書は副次的、補助的に使用するようになった。
・授業のはじめに目標を示したり、一つ一つの活動の目的を生徒に伝えたりするようになった。
・授業をより効率的に行うことを意識し、ICT を頻繁に活用するようになった。ICT の活用により、英語を英語で理解させることが非常に容易になった。
・ライティングに関する専門書を頻繁に読んだり、研修講座にも参加してみずからもパラグラフライティングに取り組んだりするなかで、自分が学んだ知識や技能を生徒に伝えるよう努めた。

今後の課題（次の改善点など）

・思いついた考えを、和英辞典を使って直訳するのではなく、自分が使える英語で表現するというようなストラテジーについて、授業の中で扱う必要がある。
・キーワードを提示し、そのなかのいくつかを使ってパラグラフを書かせるなど、さまざまなライティング活動にも挑戦させたい。
・基礎的文法知識の不足が原因で書けない生徒に対しては、個別のケアが継続的に必要である。できた点を褒めて、励ましながら指導したい。
・評価スケールを見直し、より効果的な形成的評価と指導内容の向上を目指したい。

まとめ・感想

パラグラフライティングは生徒全員にとって初めての経験であり、生徒は自分の意見を自由に書くということに対し新鮮さを感じていたため、飽きさせずに取り組ませることができ、予想以上の成果を上げることができたと思う。多くの生徒が「楽しくて、ためになる」と感じてくれたこと、書ける量が徐々に増え、パラグラフを完成できる生徒が増えたことは大きな喜びである。今後は、評価スケールの見直しや、共通する誤りの分析、生徒のアンケートの分析などを通して、指導内容を吟味し、今後のライティング指導に役立てたい。

本研修ではアカデミアのスタッフの方々に毎回親身なアドバイスを頂いた。また、研修に参加した他の先生方からも多くの刺激を受け、自らの授業改善に繋げることができた。心から感謝したいと思う。本研修の授業改善プロジェクトで学んだことを、勤務校の先生方と力を合わせながら活かし、生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上に貢献したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Editors of Time for Kids Magazine.(2006).Time for Kids Ready, Set, Write! Time Home Entertainment, Inc

Newsweek Education Program.(2006).Essay Writing for High School Students: A Step-by-Step Guide. Kaplan Publishing

村野井仁.(2006).『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店

生徒と教師がともに学ぶ自由英作文の授業

科目名	ライティング	学 年	3	形 態	ＨＲ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・対象生徒は 3 クラス、合計 66 名（男女比 22：44）である。

・ライティング(4 単位)は２、３年次の分割履修であり、教科書内容はほとんど学習済みである。

・学習には熱心だが、黒板に出て書いたり意見を述べたりすることに抵抗を示す生徒が多い。

・授業外でも、語彙、文法の問題集等に熱心に取り組んでいる。

・ほとんど全員の生徒が四年制大学へ進学する。

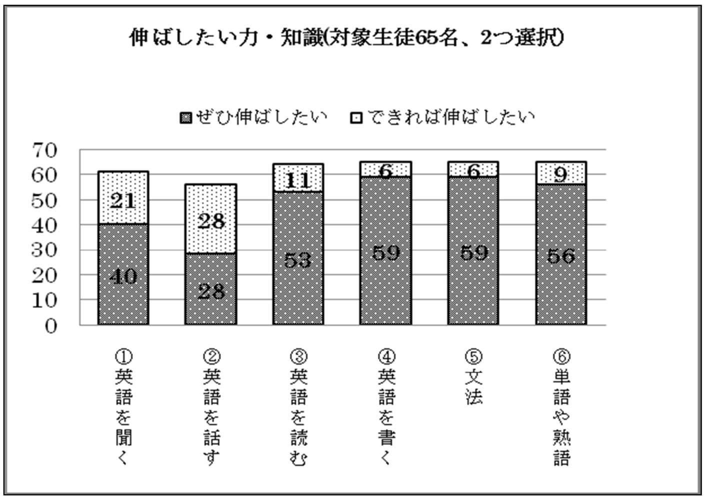
解決すべき課題

大学入試の自由英作文対策に重点を置く授業なので、正確で効果的なパラグラフライティングの指導が必要となるが、まとまった量の英文を書くことへの不安が強い。「書くこと」だけでなく「話すこと」も含めた英語による自己表現への抵抗を小さくし､実力を伸ばすことが課題である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・アンケート（７月：伸ばしたいと思う力や知識）＊回答者 65 名

書く力について「ぜひ伸ばしたい」という生徒が 90.8%と、この授業に対する期待が非常に高いことがうかがえた。また、文法や語彙に対する意識も高いことがわかった。



「書く力」に関して、大学入試で短文英作文が必要な生徒が 6 割、長文英作文が必要な生徒が 4 割である。また英文要約を必要とする生徒もいるので、授業内でそれぞれに必要な力を伸ばしていくために工夫を凝らす必要がある。

・30 分英作文（４月：自己紹介）

主語・動詞の組み合わせ、語順、時制などに関わる誤りが散見されたが、与えられた時間内で書きあげようと努力する姿が見られた。

・20 分英作文（７月：“My High School Days”）

ほとんどの生徒が 20 分内に書き終わらず課題として後日提出した。

改善の目標

・生徒の 8 割以上が、与えられた課題に対して 20 分で 100 語以上のまとまった英作文を書くことができる。

改善のための手だて

・パラグラフの枠組み、ディスコースマーカー、マインドマップ、アウトラインの指導をすれば英文を書く際の助けになるだろう。
・毎時間いろいろなタイトルで英作文を書くことで、抵抗感を減らすことができるだろう。
・書いた英作文を使って話し合う活動を行えば、読み手を意識することにより書く動機づけを高めることができるだろう。

＜授業の流れ＞

文法・語彙の学習も考慮に入れつつ、英作文の指導を中心に授業を組み立てた。[90 分授業]

10 分：①英作文参考書暗唱例文よりテスト
20 分：②教科書のボキャブラリー・文法チェック+英語のことわざチェック
25 分：③パラグラフライティングについての説明・練習
20 分：④パラグラフ/エッセイライティング実践
15 分：⑤生徒間の添削、⑥書いた英文を使ったディスカッション、⑦文法練習など

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

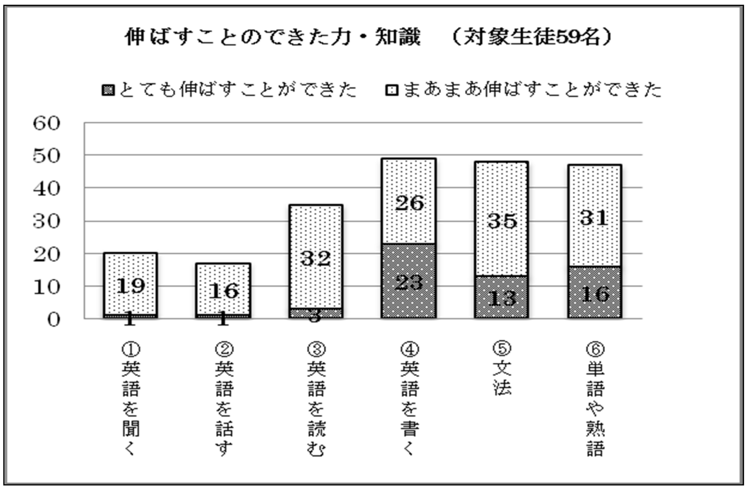
・英作文の比較分析（“My High School Days”）

月	制限時間内の提出率	平均語数	最大語数	最小語数	100 語以上の生徒
７月	12.2%	(124.5)	(170)	(70)	(95.1%)
１２月	100.%	117.3	180	45	71.4%

７月の作文は、制限時間(20 分)内に提出できた生徒は 12.2%で、後日課題として提出されたものも含めて算出したデータである。12 月は全員が時間内に提出することができたが、100 語以上書けた生徒は 71.4%にとどまり、当初の目標達成までには至らなかった。文章の構成に注目すると、7 月の作文は事実の羅列が多かったのに対し、12 月のものではトピックセンテンスを立ててパラグラフを構成している作品が多く、ディスコースマーカーを意識して使うなど、読み手に対する意識の向上がうかがえた。

・アンケート（12 月：伸ばすことができたと思う力や知識）＊回答者 59 名

「書く力を伸ばせた」と感じた生徒は 83.1%であった（「とても伸ばすことができた」:39%、「まあまあ伸ばすことができた」：44.1%）。



また、自由記述で英作文の練習で感じた変化を書かせた。以下はそのまとめである。

すらすら書けるようになった、書くスピードが速くなった・・・25 名（42.4%）
書く抵抗感がなくなってきた、長い英文を書くのに慣れてきた・・・12 名（20.3%）
構成を考えて書くようになった、内容が濃くなった・・・6 名（10.2%）
いろいろな表現を使うように心がけるようになった・・・2 名（3.4%）
以前のほうがよく書けていた・・・2 名（3.4%）

・アンケート（12 月：授業の活動で役に立ったもの 3 つとその理由）＊回答者 59 名

活動	人数	割合
①問題集からの小テスト	27	45.8%
②単語・短文テスト	42	71.2%
③パラグラフライティング(説明)	22	37.3%
④エッセイライティング	42	71.2%
⑤お互いの作文チェック	12	20.3%
⑥ペアワーク	4	6.8%
⑦文法問題集(家庭学習課題)	28	47.5%

②については、教科書の例文から取ったものが中心であったが、数多く短時間でやることで文法・語彙の見直しになったと答えた生徒が多かった。

③については、リーディング力の向上にも役立ったと答える生徒が 13 名で、この活動が統合的にスキルを伸ばす活動として効果があったと言えるかもしれない。

⑤については抵抗が強いと予想していたが、実際には熱心に取り組む生徒が多かった。「役立った」と答えた生徒は 20%ほどであったが、「少々いやだった」「恥ずかしかった」は少数で、「理解してもらえてうれしかった」「他の人の考え方・表現を知ることは刺激になった」「自分の気づかないミスを指摘してもらえて勉強になった」など前向きな反応が多かった。

⑥については、頻繁に行うことができなかったが、「伝えるむずかしさを感じた」「もっとやる機会があれば力になった」「恥ずかしかったがいい機会だった」というコミュニケーションを意識した感想が見られた。

教師の変化

・生徒の要望を聞きながら、到達目標を意識して授業を組み立てた。そのために、さまざまな教材を工夫するようになった。また、活動の目的や効果を生徒たちに明確に伝えるようになった。

・ライティングの評価についてはいろいろと悩む点もあったが、文法や綴りの正確さだけでなく構成や内容も評価の観点とすることで、生徒それぞれの考えを楽しみながら作文を読むようになった。また、内容についてのフィードバックは授業中の話題になることもあり、教室の雰囲気を和やかにし、生徒たちとの距離が縮まったと感じることができた。

・ライティングについて本やインターネットで情報収集をし、ライティング研修講座に参加するなど積極的に取り組むようになった。「書き手」「読み手」の両方を経験することにより、さまざまな知識、技能を得ることができた。また、それらを授業に活用するように努めた。

今後の課題（次の改善点など）

・年度途中からの取り組みだったので、パラグラフ/エッセイライティングに取り組む期間が短くなってしまった。長期的展望を持った指導を心掛けていきたい。

・語数の伸び悩みには、文法や語彙の知識不足や英文構成の技能不足などさまざま要因があるので、一方的にフィードバックするだけでなく、個別にもっと丁寧に対応していく必要がある。

・文法を軸にした短文英作文については、テンポよく口頭で行えば言語知識を言語使用につなげる練習として扱うことができる。また、それを聴くことで知識の確認も期待できる。

・ライティングに基づくディスカッション、ディベートなどを早い時期に行っていけば、それだけ早く「伝える」ことに重点を置いてライティングに取り組めるようになると思う。

まとめ・感想

・英語を学ぶ意義は、実際に使ってコミュニケーションに活かすことにあると思う。受験を意識すると、「読む」「聞く」に重点が置かれがちだが、「書く」「話す」を通してこそ知識が定着し、技能も伸びることを生徒とともに実感した。今後も 4 技能を伸ばす授業を工夫していきたい。

・エッセイライティングの指導には、構成などを全体で教えることと、各生徒の作品に適切なフィードバックを与えることが必要である。特に、マッピングの指導を行った後の生徒たちの書くスピード、集中度の変化には驚くとともにその必要性を再認識した。

・エッセイライティングを毎時間続けることで多くの生徒が書くことに慣れた。まさに「継続は力なり」であり、長期的計画の必要性を感じる。「授業以外でも書いてみたい」「難しい内容も書いてみたい」と考える生徒たちが増えてきたことは喜ばしいことである。また、「難しいがやりがいがある」と感じる生徒が増えてきたことも、授業改善への何よりの励みになった。

・本研修を通じ、アカデミアの方々からは親身で有益なアドバイスや情報を、研修に参加した先生方からは多くの刺激を受けることができた。おかげでこれまで経験がなかったような授業に取り組み、授業改善ができた。心から感謝し、今後も助言を頂きながら向上していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

大井恭子(2008).『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店

ケリー伊藤(2002).『英語パラグラフ・ライティング講座』研究社

読解力向上のための英文要約指導

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	HR・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

・大学進学を目指す生徒がほとんどで、国公立大学を第一希望にしている生徒が多い。対象クラスは２クラスで、男女比はそれぞれ、６：４と３：７である。コース制で、クラス間の男女比の差が大きい。

・英語の基礎的な語彙力、文法力はほぼ身についており、速読教材やレベルの高いリスニング問題にも積極的に取り組んでいる。

解決すべき課題

・細部まで正確に英文の内容を読み取ろうとする一方、「木を見て森を見ず」という状態になり、全体像の把握に欠けるところがある。

・生徒は、語彙や文法について十分なインプットを受けている一方、それに見合った自己表現、すなわちアウトプットをする機会が不足している。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・「授業で力を入れて欲しいこと」というアンケート項目に対して、多くの生徒が「文法・構文」と「内容理解・和文英訳」を挙げた。

・アンケートによると、ほとんどの生徒が、授業で「要約をしたことがない」と答えた。

＜考察＞

生徒の希望に従えば、文法や和訳に力を入れることになるのだが、それだけでいいのか疑問を感じた。教科書の大半は、辞書を使えば生徒自身で内容を理解できるように思われる。多くの生徒が国公立大学の二次試験を受けることを考えると、内容把握はもちろん、読み取った内容を自分のことばで表現する力も伸ばす必要がある。そこで、訳して終わりではなく、読んだ内容を「要約」させてはどうかと考えた。アンケートで希望が多かったわけではないが、生徒の現在の力と進路希望を考えると、是非「要約」に取り組ませたいと考えるようになった。

改善の目標

課題文について、＊構成の整った要約文（英文）を、できるだけ自分のことばを使って書ける生徒がクラスの８割以上になる。

＊「評価スケール（後述）による総合評価 ＝A」とする

改善のための手だて

○ 教科書本文の要約を英文で書く活動を導入すれば、英文の大意を把握する力と書く力が向上するだろう。

・毎回の授業で、その時間に読んだパート全体の英文要約を短時間で書かせる。
・最後にモデル要約を配布し、含めるべきポイントを確認させる。

○ パラグラフの主題を確認させる読解の活動を導入すれば、英文の大意を把握する力が向上し、要約にも役に立つだろう。
・各パラグラフのタイトルを付けたり、パラグラフを１文で表現する等の活動を取り入れる。

<u>生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）</u>

＜生徒の取組状況＞

・生徒は、英文を理解する際、一文一文を詳細に訳すことには慣れている反面、情報の取捨選択では戸惑う様子がしばしば見受けられた。情報の重要度を見分ける練習として、各パートの構成や、一つ一つのパラグラフの要点を考える活動も、授業の中に取り入れることにした。
・各パートが終了するたびに要約を課したものの、時間が足りず時間外の宿題になってしまうことも多かった。ただし、その場合でも必ずモデル要約を配布した。
・モデル要約については、事後のアンケートによると、約 7 割の生徒が「(時間外でも) 目を通した」と答え、「使われている表現等にも注目して読んだ」という生徒も半数に近かった。文のつなぎ方や言い換えの参考になったのではないかと考える。

＜英文要約テスト＞（９月・11 月）

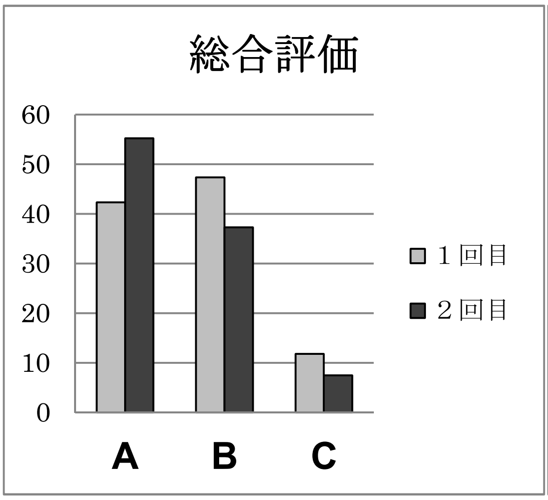
[テストの概要] 200W 程度の課題英文（某大学の入試問題）を読み、その内容をできるだけ「自分のことば」を使い、＊「一文で」まとめる。(解答用紙 : 4.3cm×15.3cm に 5 行分 50W 程度、制限時間 : 課題文の読解も含めて 15 分)

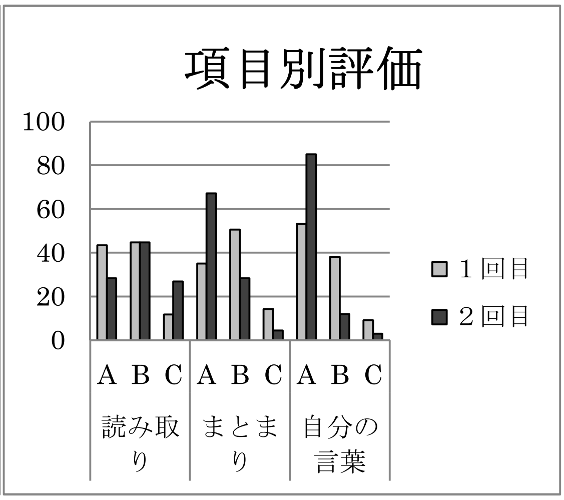
＊普段の授業では、「一文で」という制約はしていないが、テストとしては、大学の入試問題に即した方が、生徒がより真剣に取り組むだろうと判断した。

[テストの評価]（評価方法は研究の余地あり）

評価項目	評価規準	達成項目の数による評価
Ⅰ.情報の正確な読み取り	①全体のテーマ ②筆者の主張 ③主張に関する譲歩(１回目)や論拠(２回目)	○○○ → A ○○× → B ○××／××× → C
Ⅱ.全体のまとまり	①接続詞等を有効に使って自然な流れの英文になっている ②理解の妨げとなる大きな文法エラーがない	○○ → A ○× → B ××／極端な情報量不足 → C
Ⅲ.自分の英語を使った簡潔な表現	①本文の引用でないオリジナルのフレーズ（言い換え）が１カ所以上ある ②文を再構築しながら１文でまとめている。	○○ → A ○× → B ×× → C
総合評価	ⅠⅡⅢの評価（ABC）を合わせて判断	AAA,AAB → 総合 A ABB,BBB,BBC → 総合 B BCC,CCC → 総合 C

テストの結果（グラフの縦軸の数字は%）





・２回目でＡランクが５割を超え、B、Ｃランクが減少したが、総合評価Ａが８割以上という目標には及ばなかった。目標値が高かったうえに、期間が短かったことが原因かもしれない。

・「情報の読み取り」の観点では、２回目でＡの人数が減少し、Ｃが増加した。２回目の英文の難易度の高さがこれほど結果に影響することは予想外だった。

・１回目では、本文の切り貼りや、接続詞等の誤用が多く見られたのに比べ、２回目は接続詞等の使用に問題のある生徒は減り、自分なりの英語を使い、指定通り全体を１文でまとめようという努力が見られた。

生徒の要約例（同じ生徒の作品）

【１回目】

It is known that the best violins were made in Cremona, Italy, about 200 years ago. But the reason have not discovered yet, the age, wood, size and shape of violine are not appropriate element of good sound. It is impossible to resolve the reason. （45W：原文のまま）

＜評価の観点＞ ３つの文に分かれており、２行目の But で始まる文は、文中のカンマによる区切れがわかりにくく、つながりが不自然である。

【２回目】

The reason that boys more successed in science and mathematics than girls derives from their first days in nursery school where males are encouraged to work on their own and to complete tasks, which is useful to solve problems later on. （41W：原文のまま）

＜評価の観点＞ 接続表現（この例では関係詞）を使いながら、一文でまとめている。

＜考察＞

・「自分の英語を使う」という観点では、１回目から努力は見られたが、２回目はさらに積極的に自分の言語知識を活用していた。２回目の課題文は「男子が理数系で成功する傾向」に関するものであるが、「女子が成功できない理由」と視点を変えて要約した生徒もいた。

・「読み取り」より「表現力」の観点で伸びが目立ったのは、要約の経験がない生徒がほとんどで伸びしろが大きかったということかもしれない。１回目で見られた不自然な接続表現は、それまでのアウトプットの少なさに起因すると考える。知識は十分なはずだが、書くときに

は、論理性を考慮せず、感覚的に使用しているように見えた。要約は論理的思考力を育てる一つの効果的手段になると思う。

＜生徒の声＞（事後アンケートより）

・8割以上が要約やパラグラフ構成を今後も授業で扱うべきだと答えており、「筆者の意図を考えるようになった」「内容理解が深まった」「受験勉強を始めて要約の大切さがわかった」という感想を得た。
・少数ではあるが、「本文の解説の前に自力で先に要約を書きたかった」と答えた生徒がいる。今回の取組では、生徒が安心して英文要約を書けるように、内容を確認した後に要約を書くという活動にしたが、意欲の高い生徒にとっては、物足りなかったかもしれない。

教師の変化

英文要約を授業で扱うことには以前から関心があった。英文を読んで内容を簡潔に「英語で」表現するのは、高校の英語学習の大きなゴールの一つだと考えている。今回、さまざまな制約はあったが、思い切って英文要約を取り入れてみた。しかし、進めていくにしたがって、自分自身が要約の指導方法の知識も経験もないことから力不足を感じた。毎回が手探りであったが、受験を控えた生徒たちが新しいことに真面目に取り組んでくれたことは大きな励みになった。

今後の課題（次の改善点など）

・文法解説と和訳に終始するのではなく、パラグラフ構成や要約等、メッセージの概要や意図を理解する活動を今後も積極的に取り入れる。
・要約作成のわかりやすく効果的な指導方法を引き続き研究する。
・意欲の高い生徒への対応として、生徒が支援なしに取り組む要約課題も準備する。

まとめ・感想

今回の取組で最も苦労したのは、パラグラフ構成を説明するためのプリントと、モデルの英文要約を毎回準備しなければならなかったことだ。これまで、授業の準備と言えば、題材に関する情報収集と語法や文法の下調べくらいで済ませていたが、今回は、私自身も筆者の意図をしっかり考えてきちんと英文と向き合い、読解の奥深さをあらためて感じた。

また、英文要約だけでなく、授業中英語を使うことも当初は多くの生徒にとって違和感があったようである。しかし、事後のアンケートによれば、「今後も続けるべきだ」という意見が 8 割を超え、さらに驚いたことに、「生徒ももっと英語を使うべきだ」という考えに多くの生徒が賛同した。私のつたない英語を毎回聞かされて、「このくらいなら自分もできる」と思ったのかもしれない。この取組で、生徒は本当に大きな可能性を持っていると感じたので、近い将来、要約に加えて、生徒が自分の意見を英語で述べるような場面もさらに作っていきたいと考えている。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司(編著).(2009).『英語リーディングの科学』研究社

金谷憲(編)・高山芳樹・臼倉美里・大田悦子.(2011).『高校英語授業を変える　訳読オンリーから抜け出す３つのモデル』アルク

教科書読後の５文サマリー活動

科目名	リーディング	学 年	3	形 態	ＨＲ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

本校は単位制の総合学科である。３年次の科目は必履修科目ではなく、自分で選択をしているため授業の雰囲気はよい。特に大学の一般入試を受験する生徒向けには「上級リーディング」という科目を設置しており、一般の「リーディング」を選択する生徒の多くはＡＯ入試や推薦入試での進学希望者であり、難易度の高い英語の授業を受けるというよりも、比較的容易な教材で英語に触れていたい、という生徒が多い。担当クラスは25名（男子６名、女子19名）である。

解決すべき課題

素直な生徒が多いが、学習が受け身になりがちで、主体的に学ぶ姿勢に欠ける。プリント作業などは抵抗なくできるが、教材を主体的に読んで、自分の意見を持ったり、まとめたりするという経験が全くない。また、英語で文を書かせようとすると諦めてしまう傾向が強い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

アンケート：過去２年間の英語Ⅰ、英語Ⅱの授業に対する学習態度と理解度（５月末：回答数23）

授業の楽しさ	非常に楽しかった	2人（9%）
	まあまあ楽しかった	10人（43%）
	どちらかといえばつまらなかった	9人（39%）
	非常につまらなかった	2人（9%）
学習内容	ほぼ理解できていたと思う	0人（0%）
	まあまあ理解できていたと思う	10人（43%）
	あまり理解できていなかったと思う	11人（48%）
	まったく理解できていないと思う	2人（9%）
学習への取組	非常に努力した	2人（9%）
	まあまあ努力した	11人（48%）
	あまり努力しなかった	8人（34%）
	まったく努力しなかった	2人（9%）
主体的に取り組めた英語の活動	教科書の音読	7人（30%）
	ペア活動	8人（34%）
	グループ活動	9人（39%）
	文法の説明を聞き、ノートにまとめる	5人（21%）
	プリントなどを埋める作業	13人（56%）
	自分で文を作る作業	0人（0%）

生徒たちに授業は「楽しい」「理解できる」「努力する甲斐がある」と思ってほしい。さらに、授業中になるべく生徒たちを主体的に取り組ませるため、授業中の活動にバリエーションを持たせ、生徒間で声を出し合う活動を工夫して授業を活性化したい。さらに、読んだ後に自分の考え

を持たせ、それを英文で書く作業に慣れさせたいと考えた。

改善の目標

1．「授業が楽しい」「理解できた」「努力できた」と感じる生徒をクラスの８割以上にする。
2．活動に主体的に取り組む生徒をクラスの８割以上にする。
3．「教科書本文を４文で要約させ１文の感想を書く」という５文のライティングタスクを完成することができる生徒をクラスの７割以上にする。

改善のための手だて

1．語彙の導入や定着に関わる活動を工夫すれば、記憶の助けになり、語彙習得が進むだろう。
　① 新語や、抽象名詞などについて、折り紙を使ってそれぞれの語に対する自分なりの色イメージを持たせながら導入する。その後、色を見て単語を想起させることで記憶を促す。
　② 生徒を５人グループに分け、４人にターゲットとなる語を与えてその語から連想される語を１語ずつ答えさせ、残りの１名にその語は何かを当てさせるというゲームを行う。他の語との意味的なつながりのなかで多面的に語をとらえさせることで記憶を促す。
2．読解のプロセスにペアワークやグループワークの活動を導入すれば、生徒が教材を主体的に読む姿勢を促すことができるだろう。
　① 教科書本文からキーワードを抜いたテキストを渡し、抜けている単語を推測するペアワークを導入する。動詞を抜いて起きた出来事を順に推測させる活動も行う。
　② ペアのそれぞれに、文のある語が正しかったり間違っていたりするテキストを渡し、お互いに読み合いながら、文脈を考えつつ合っているものはどちらのシートのどの語かを当てる information gap の活動を導入する。
　③ 文字による理解だけでは不十分で、その情報を使ったプロジェクトを通して理解させた方がよい内容については、グループでポスターを作成する活動を導入する。
3．内容の要約や意見・感想を書く活動を段階的なタスクによって続けていけば、無理なく英語での自己表現を促し、英文を書くことにも慣れていくだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

アンケートⅠ：それぞれの活動の取組状況（1 月末：22 名回答）

1．単語を覚える活動について

① 色で覚える 折り紙ワーク	興味を持って取り組み、一生懸命やった	18 名（82%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	2 名（ 9%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	2 名（ 9%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0 名（ 0%）
② ４マス連想 単語当てゲーム	興味を持って取り組み、一生懸命やった	6 名（27%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	14 名（64%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	2 名（ 9%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0 名（ 0%）

２．主体的にテキストを読ませるためのペアワークやグループワークについて

① キーワード推測ゲーム	興味を持って取り組み、一生懸命やった	6名（27%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	14名（64%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	2名（ 9%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0名（ 0%）
② 間違いさがしのペアゲーム (information gap)	興味を持って取り組み、一生懸命やった	14名（64%
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	6名（27%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	2名（ 9%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0名（ 0%）
③ ポスター作成	興味を持って取り組み、一生懸命やった	9名（41%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	9名（41%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	4名（18%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0名（ 0%）

３．サマリーライティングに関わる活動について

① 1パラグラフの1文要約（グループワーク）	興味を持って取り組み、一生懸命やった	12名（55%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	9名（41%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	1名（ 4%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	0名（ 0%）
② 4文サマリー＋1文感想（個人の活動）	興味を持って取り組み、一生懸命やった	6名（27%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	11名（50%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	4名（18%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	1名（ 4%）
③ 暗記した②の10分再生活動（個人の活動）	興味を持って取り組み、一生懸命やった	3名（14%）
	まあまあ興味を持って取り組み、普通にやった	11名（50%）
	あまり興味を持って取り組めなかった	7名（32%）
	まったく興味を持って取り組めなかった	1名（ 4%）

一人で行う、暗記をしなければならないなど、負荷がかかる活動ほど、生徒には支持をされなくなっていくことがわかる。この一連の活動は年間を通じて 15 回行い、②で毎回 5 文書き上げる生徒は平均して 24 名中 17 名（70.8%）であり、「改善の目標」３は達成された。

さらに、それぞれの活動への取組をアンケートで見てみると、３の②③以外のすべての活動において、「興味を持って取り組めた」とする生徒が 8～9 割となっており、「改善の目標」２についてもおおむね達成されたと言ってよいだろう。

アンケートⅡ：１年間のリーディングの授業に対する学習態度と理解度（１月末：回答数23）

授業の楽しさ	非常に楽しかった	7人（31%）
	まあまあ楽しかった	12人（52%）
	どちらかといえばつまらなかった	4人（17%）
	非常につまらなかった	0人（ 0%）
学習内容	ほぼ理解できていたと思う	2人（ 9%）
	まあまあ理解できていたと思う	18人（78%）
	あまり理解できていなかったと思う	3人（13%）
	まったく理解できていないと思う	0人（ 0%）

学習への取組	非常に努力した	3 人（13%）
	まあまあ努力した	15 人（65%）
	あまり努力しなかった	5 人（22%）
	まったく努力しなかった	0 人（ 0%）

「授業が楽しかった」「学習内容が理解できた」とする生徒は全体の 8 割以上となり、「改善の目標」 1 の下位項目のうち 2 つは達成されたが、取り組みについて、「あまり努力しなかった」が 23 名中の 5 名（22%）いたため、これについてはわずかな差で達成できなかった。

教師の変化

生徒の声を聞くようになったことが一番の変化である。長年「読解」は教えてきたものの、教材が生徒にどのような影響を及ぼしているか、その教材を読むことで生徒はどんなことを思い、どのように成長するのかということに関してはまったく無関心であった。読んだ教材について生徒が何を感じるかに興味が持てるようになり、さらにそれが教材研究の柱ともなった。

今後の課題（次の改善点など）

はじめのアンケートで、約半数の生徒が過去２年間での英語の授業が「つまらなかった」「理解できていないと思う」「努力しなかった」と答えながらも、３年次でも「リーディング」の科目を選択していることがわかった。生徒は「つまらない」「理解できない」「努力できない」授業であっても英語を学ぶ必要があると考えていることがわかり、「楽しい」「理解できる」「努力する甲斐がある」授業へと変えるための方策を模索してきた。しかし、授業の中にさまざまな活動を取り入れ、生徒間のインタラクションを増やしても、やはり、自力で取り組む、暗記するといった地道な作業については「興味を持って取り組めない」という生徒が増えてくる。言語活動を通して「協力」や「発見」を体験し、他との「つながり」を実現させたい、という私の思いは十分通じたという達成感がある反面、その分「自分の力で英語に向き合う」という、ある意味英語学習の根本的な部分に魅力を感じなくさせてしまっているのではないか、との危惧を覚える。英文をつくる、暗記する、というような個人活動にどのような工夫ができるかが次の大きな課題である。

まとめ・感想

今の高校生の人間関係を考えたとき、SNS などの普及により交流は増えているように見えるが、必ずしもそれが相互理解につながっているとは言えない。「ことば」を教える教師としての大きな役割は、「ことば」は「人と人とのつながり」のためにある、ということを教えることだと、私はつねに思っている。インターネットや英語学習教材が普及し、一人でいても語学学習が十分できる現代において、教室に生徒を集めて英語の授業を行う、という意義がどこにあるのかと考えると、やはり、同じ授業を受ける仲間と向き合い、自己を表現して相手の言葉に耳を傾け、伝え合う共感と喜びを味わわせることにあるのではないかと考える。学習者同士が協働できる楽しさ、おもしろさ、驚きが、さらなる学習の動機づけとなるように教室を豊かな学びの場にしたいと、授業について考え抜いてきた幸せな一年間だった。言語の学びは教師から学習者へ知識を移すことではない。学習者自身がコントロールしていくクラス活動に支えられた授業が展開できるよう、これからも研さんを積んでいきたい。

平成 24 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日　平成 25 年 3 月 31 日
編　集　神奈川県立国際言語文化アカデミア
　　　　（担当）村越 亮治　江原 美明
発　行　神奈川県立国際言語文化アカデミア
　　　　　横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2－1
　　　　　℡ 045(896)1091